

令和7年度

布教

ふきょう
らしんばん

羅針盤

浄土宗

一枚起請文

往生極樂のためには、
ただ一向に念仏すべし

一

令和七年度 布教羅針盤

『一枚起請文』

往生極樂のためには、ただ一向に念仏すべし

◎目次◎

教諭……………	浄土門主 伊藤唯眞 猊下	6
---------	--------------	---

はしがき……………	浄土宗務総長 川中光教	16
-----------	-------------	----

第1章 布教講義

『一枚起請文』の心	第一回	—浄土宗のお念仏—
-----------	-----	-----------

……………	神奈川教区 慶岸寺 林田康順	22
-------	----------------	----

第2章 布教実例

頼みとすべき道しるべ

..... 鳥取教区 大善寺 米村昭寛

102

往生疑いなし

..... 兵庫教区 法輪寺 北村隆彦

110

只、往生極楽の為に

..... 千葉教区 浄蓮寺 郡嶋泰威

118

あとがき.....

教育学事審議会布教専門部会 部長 池田常臣

128

凡 例

典拠を示すにあたっては次の略号を用いる場合がある。書名のあとの数字は、巻数および頁数を示す。

- 聖典……浄土宗聖典（浄土宗）
- 昭法全…昭和新修法然上人全集（平楽寺書店）
- 浄全……浄土宗全書（山喜房仏書林）
- 御法語…平成新版元祖大師御法語 前篇・後篇（知恩院）
- 法伝全…法然上人伝全集（法然上人伝全集刊行会）
- 大正蔵…大正新脩大蔵経（大正一切経刊行会）

なお引用文は、原則として漢文は書き下し文に、旧字・旧仮名づかいは、新字・現代仮名づかいにあらためたほか、適宜ルビ等を付した。

教 諭

一、はじめに

義山上人は「広くすれば選択集、縮むれば一枚起請也」（『一枚起請弁述』）と述べられ、『一枚起請文』には法然上人のみ教えの真髓が説き尽くされています。浄土宗教師であれば『一枚起請文』は親しまれていると存じますが、成立の経緯や内容などを今一度原点に立ち返り習熟することが大切であります。

また、たとえ内容をよく理解なさっておられても、それが実践できていなければ『一枚起請文』を本当にわかったことにはならないでしょう。『一枚起請文』は何を実践すべしと説いているのか、以下でそれを改めて確認してゆきます。

令和七年度からの四年の間は、法然上人の御遺誓たる『一枚起請文』

を布教教化の指針に据えていただきたいのであります。さらに『布教羅針盤』において、今後四年間にわたり順次示される『一枚起請文』の肝要なる教えを抛り所として、自行化他の実りをあげられることを期待します。

一、「ただ一向に念仏すべし」Ⅱ「専修念仏」の実践

『一枚起請文』の中で最も有名で、最も重要な御詞は「ただ一向に念仏すべし」であるといえましょう。他の行をすることなく、ひたすらお念仏（称名念仏）だけを修してゆけということです。言い換えれば「専修念仏」すべしということにもなります。専修念仏とは一向に称名念仏だけを修してゆきなさいという教え、またそうすれば「百即百生」、即ち百人いれば百人とも往生できますよという教えです。「一向に」とは

他の行をまじえないことです（『選択集』第四章）。

法然上人はまさにその専修念仏を忠実に実践されました。そのことは『隆寛律師伝説の詞』の「かつては日に三回、『阿弥陀経』を讀誦していたが、その内容は結局念仏せよということなので、今は一回も讀誦することなく、お念仏ばかりである」という一文や、法然上人が毎日少なくとも三万遍のお念仏をなさっておられたことなどから分かります。三万遍の念仏をすれば、他の行を修すことなど不可能です。

ところが、現代にあつて、この専修念仏は法話やお説教であまり強調されることがなく、ほとんど実践もなされていないと言っているのではないのでしょうか。念仏を申しておられる方はそれなりにいらっしゃるにしても、それを専修なされている方はごく少数のように思われます。

現実問題としては「日常勤行式」に既に読経や礼讃が含まれますし、

念仏だけでは法事もお葬式もできないということもあるでしょう。ですから、現代にあつては実際には法然上人のように完全な専修は難しいかもしれません。しかしながらできる限りそれに近づける努力はできるはずです。

念仏で往生が可能ということは既に法然上人以前にも説かれていたわけですので、そのようなことからしますと、法然上人の教えの特色はまさにこの念仏の「専修」にあります。専修であつてこそ往生できるという教えです。よつて法然上人の教えを受け継ぐ私たち浄土宗の者は、改めてこの専修念仏の教えを再確認し、自ら実践し、檀信徒にもできるだけ説いてゆくことが必要といえるのではないでしょうか。それが自身ならびに檀信徒の往生にもつながり、法然上人への報恩になるものと思われれます。

三、三心・四修と申すことの候

往生のためには三心、即ち信心が必要です。三心の中の一心でも欠いたなら往生できないことは、法然上人の御詞においても繰り返し述べられているところです（『念仏大意』『大胡太郎実秀へつかはす御返事』など）。

ただ、この三心や四修も、『一枚起請文』で説かれるとおり、お念仏を続ける中で自然と具わってくるもの（この点が信心重視の浄土真宗と異なる点です）。ですからやはり先に申しましたように、お念仏を専修する、少なくとも続けてゆくことが大切といえます。

四、奥深きことを存ぜず、智者の振る舞いをせず

現代人はどうしても理屈が先に立ってしまします。ややもすると、この念仏往生の教えを他の教えや思想と結びつけて理解したり、自分勝手に独自に解釈してしまうことがあります。でもそのようなことをすれば、（弥陀・釈迦の）二尊のあわれみに外れ、本願に漏れることになってしまいうわけです。

この「奥深きこと」を含め、「智者の振る舞いをせず」ということは、専修念仏の実践をする際に非常に大切であるからこそ、「ただ一向に念仏」と仰るだけでなく、「愚鈍の身になして、智者の振る舞いをせず」と付け加えられたのだと考えられます。

では、なぜ智者の振る舞いをしてはいけないかというと、私たちは凡

夫であるにもかかわらず、智者と思うことによって、「信機」（自身が凡夫であると認識すること）を欠くことになるからです。「信機」を欠けば、深信ひいては三心の一部を欠くことになります。また信機を欠けば、詳述できませんが、信法も願生心も、さらには至誠心も欠く可能性があります。

もちろん、多くの方は自身を智者などとは思っていないと仰ることでしょう。しかしながら、もし他人と意見が異なる場合、ついつい自身の間違っている可能性を考えることなく、自分が正しいと主張しがちです。またインターネットが進展して様々な知識を簡単に、しかも大量に獲得することができる現代にあつては、比較的容易に「智者」になることができる時代、逆に申しますと「愚鈍の身」であるという自覚が持ちにくい時代になっているようにも思えます。

しかしながら自身に多くの欠点や煩惱があるのは間違いありません。

法然上人はそれをしっかりと見つめなさいと仰るわけです。そうすれば自身が愚者であることが理解できて、それによって自然とお念仏も申せ、三心も具わってくるとお考えになっていたようです。

法然上人は決して知識を得ることを否定はしておられません。ご自身、「智慧第一の法然房」であられたわけですので。しかしながら、たとえばそうであつても、智者の振る舞いをせず、自身が愚鈍であることをしっかりと認識せよ、私たちは所詮、愚鈍の身であるからというわけです。

五、具体的な実践

このように、自身に具わる悪しき部分をしっかりと認識し、愚鈍の身になして念仏を専修してゆく、それが浄土宗の僧侶・檀信徒の理想像と

いえましょう。

では、具体的にはどのようにすればいいのか。まず「専修」については、本堂やお仏壇の前でのお念仏だけではなしに、道を歩きながらのお念仏、（安全に気をつけながらも）車を運転しながらのお念仏、湯船につきりながらのお念仏などが考えられます。お念仏を申せる状況にある時を利用してのお念仏です。例えば、少なくとも散歩の時はお念仏を申すことにしようなどというように。そしてそれが習慣となれば理想的といえます。

一方、「愚鈍の身になす」にはどうすればいいのか。本当は定期的に「懺悔」をするのがいいのかもしれませんが。懺悔をしようとすれば、自身の中の悪しき部分をしっかりと見つめることになるからです。そうはいっても、それはなかなか難しいこと。よって、現実的には自身の中に

生じてくる悪しき部分を見つめる努力を常々より行い、それを習慣としてゆくことしかないのかもしれませんが。ただし、私たちは自分では自分の悪しき部分に気づけない場合も多々ございます。その意味では他人の忠告を素直に受け入れる、もしくは考慮することも必要といえるでしょうか。

いずれにせよ、このようなことを「癖づく」こと（即ち習慣とすること）ができれば、『一枚起請文』の御教えを実践している念仏者ということになることでしょう。浄土宗をあげて、このような念仏者が少しでも増えることを念じております。

令和七年四月一日

浄土門主 伊藤唯眞

はしがき

昭和百年、太平洋戦争終戦八十年、阪神淡路大震災三十年、能登半島地震一年。鎮魂と祈りの年となるであろう令和七年の冒頭は、マスコミの寵児であった一人の大道芸能人のスキヤンダルと、大手テレビ局のコンプライアンス問題から始まった。情報発信の仕方によって人々の感情が一斉になびき、大企業の屋台骨が一朝一夕で傾く様を見せつけられた。

現代社会は日々飛び交う億万の情報に左右されている。スマートフォンを手に取りれば幾多の情報が押し寄せてくる。知りたいこと好きなものを調べるのも簡単だが、フェイクニュースや闇バイトなど魑魅魍魎が跋扈する、便利で不便な世界だ。その真贋正誤を判断することは難しく、一度信じられてしまえば流言飛語であっても簡単に拡散してしまう。時には情報を操作し大衆を操るかのように、世論を誘導するかのように利用されることもある。そして人間という種はこの情報というものが大好きでめっぼう弱い生き物である。

視点を浄土宗に移すと、時代は変容し寺院や僧侶、檀信徒を取り巻く環境も漸次変わっている。布教伝道の分野も同様で定例法要や法事の際の法話が中心であることに変わりはない

が、大衆への伝道といえば掲示板や発刊発行書物・ラジオ法話ぐらいだったものが、SNSの普及により大衆に対して布教伝道する術が生まれた。浄土宗としても今後を見据えたときに広く大衆に伝える能力を持つ人材が必要となっている。可能性は広がる訳だが、逆に一人の僧侶の言動が浄土宗全体を危機に晒す危険性が増しているとも言うことができる。

我々僧侶は人々に仏法を伝える立場である。さらに釈尊の教えを法然上人の理解に基づいて人々に伝えるのが浄土宗教師である。その言は真であって贋ではなく、正であって誤りなどあつてはならない。流言飛語を慎重否定し、人々に仏の救いを伝え、安らぎを与え、正しい道を示し歩ませる存在でなくてはならない。しかし、そうではない発信者が僧侶の中にいたならば、この現代情報化社会は非常に危険である。いわゆる邪義の拡散である。

自坊には宗旨宗派を問わず様々な相談事が舞い込んでくる。電話帳に「仏事の相談を承ります」と書いてあるからだ。当然日常の仏事相談が多数を占めているのだが、中には耳を疑う相談がある。十年以上前になる。それまで地元の葬儀といえば三導師・役僧・楽人や他宗の諷経も合わせ大人数の葬儀が多く行われていたが、急速に葬儀の簡略化が進んだ時期であった。そんな頃にかかってきた電話相談である。

「あのう、こんなこと伺って良いかわからないのですが、先日お寺に法要に行ったら住職

がおっしゃったのです。『葬儀をおろそかにして三導師ではなく一導師で葬儀する者は地獄行きだ』って。そんなことあるのでしょうか？」

宗旨宗派の儀式儀礼、地域性、寺院との関係性はあるとしても、「導師一人で営む葬儀では地獄に落ちなければいけない」などとは釈尊の教えのどこにも書いていないことをお伝えした。安堵の声が電話口から聞こえてきた。僧侶の言動の影響力を軽んじてはならない。只の一言が他人を救うこともあれば、不安に突き落とすこともある。『観無量寿経』の下品中生者の段では「不浄說法無有慚愧」とあり、間違えた教えを我が物顔で説き、私利私欲の為に仏法を広めることを地獄に墮す悪行と断じている。厳に慎まなければならないのである。では浄土宗僧侶の眞贋正誤の根拠とは何であろうか。

浄土宗僧侶には法然上人滅後、揺るがぬ行動規範がある。それは八万四千といわれる釈尊の教えから、法然上人が高純度で抽出して下さった万人救済の道が示されたもの。「一枚起請文」である。「広げれば選択集、すぼめたのが一枚起請」と譬えられる浄土一宗の肝要である。起請文というとおり、私利私欲の為でなく法然上人御自らが神仏に誓約した言葉を文章に表し、両手の朱印をもって証明された誓約書である。

「ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取り

て申す外には別の仔細候わず」であり、「智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし」であり、「安心起行この一紙に至極せり」であり、「滅後の邪義をふせがんがため」である。この唯一無二の教えを正しく実践継承し流布していくことが浄土宗教師の使命である。

昨年開宗八百五十年の記念年を終え、次の八百五十年大遠忌に向けて浄土宗は、法然上人の開宗、布教、大病、撰述、邪義、法難、入滅に到る足跡を辿る番となった。『布教羅針盤』ではその冒頭に今一度、浄土宗教師として原点回帰するために「一枚起請文」をメインテーマとし四カ年にわたって教学布教の観点から掘り下げていく。日常勤行式に収録され、僧俗ともに読み慣れ親しんだ文章であるが、これを機に今一度正しく読み返し、そして法然上人の念仏の教えを広く正しく伝えていただくことを切望する。

令和七年四月一日

浄土宗宗務総長 川中光教

◎ 第1章 ◎

布教講義

『一枚起請文』の心

第一回

―浄土宗のお念仏―

神奈川教区 慶岸寺 林田 康順

唐土我朝に、もろもろの智者達の沙汰し申さるる、観念の念にもあらず。(第一段)

また学問をして、念の心を悟りて申す念仏にもあらず。(第二段)

ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取りて申す外には別の仔細候わず。(第三段) 第一回

ただし三心・四修と申すことの候は、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ううちにこもり候なり。(第四段)

この外に奥ふかき事を存ぜば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候うべし。(第五段) **第二回**

念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし。(第六段) **第三回**

証のために両手印をもつてす。

浄土宗の安心・起行この一紙に至極せり。

源空が所存、この外に全く別義を存ぜず、滅後の邪義をふせがんがために所存をしるし畢んぬ。

建暦二年正月二十三日 大師在御判(添え書き) **第四回**

一、はじめに―『一枚起請文』の広まりと浄土宗僧侶の使命―

1、法然上人による「付属」の書

『一枚起請文』は、京都東山華頂山の太谷の禪房（現在の総本山知恩院勢至堂）において、建暦二（一一二二）年正月二十三日、二日後に往生の素懷を遂げられた法然上人が、師の命終の近いことを感じとられた常隨給仕十八年の愛弟子・源智上人の懇請により、一枚の紙にしたためられたものです。浄土宗の教えの肝要である本願念仏の意味内容と共に、念仏行者の安心・起行・作業等について、平易かつ簡潔に説き示され、「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」という『一枚起請文』本文末尾の一節こそ、法然上人がその生涯を通じて探し求め、その理論構築に努め、そして、人々に説き続けられた内容であることに異論を唱える者はいないでしょう。なぜなら、称名念仏こそ、阿弥陀仏が五劫思惟の末に誓願され、兆載永劫の修行を経て、唯一の浄土往生の行として成就された選択本願の行であり、弥陀・釈迦・諸仏が三仏同心に勧進している行だからです。まさに『一枚起請文』こそ、法然上人にとって、弥陀・釈迦・二尊、広くは弥陀・釈迦・諸仏の三仏に向けて自身の説くところに嘘偽りのないことを誓う「起請文」であり、八十年の生涯を終えられるにあたって、周

囲の弟子達はもちろん、未来世に生きる一切衆生に向けた「付属」の書であり、現代的に言えば「遺書」「形見」とも呼べるものなのです。

2、『一枚起請文』の広まり―各種擬古文の成立―

浄土宗に連なる者達にとつて『一枚起請文』は、もつとも親しまれ、もつとも多く拝読されている法然上人のご法語であり、その説示内容こそ法然上人の教えの究極として広く受けとめられてきました。そのことは、次のような『一枚起請文』の広まりからも伺い知ることができます。

〃只一向に農作すべし〃 「一枚起請文」の擬古文 三重県伊賀市の農家で発見

こうした見出しと共に、三重県伊賀市の農家から次のような『百性（姓）一枚起請文』が発見されたという記事が『浄土宗新聞』平成二十六年九月号に掲載されました。

百性一枚起請文

唐土はしらず、我朝に諸々の百性達の沙汰し申さるる豊年の念にもあらず。又、年の順季をさととりて作る百性にもあらず。唯、大晦日を極楽とするの為には、なんでも油断な

く作りを達者すれば、おのずから節季の仕舞も心安くするぞと思へとりて作る外に、別の仔細候はず。唯し、三度の食事、年内の費^いへ、皆儉約の二字にこもり候也。此外に、いろいろのたわむれ事を存ぜば、二季の取入にもはずれ、豊年にも洩れ候べし。百姓大切にせん人は、いたづらにたくわへをよくせんよりも、尼入道のごとく、髪に油をつけず、上方の真似をもせずして、只一向に農作すべし。

百姓の安心、此一紙に至極せり。われ此外に、よろしき仕方ぞんぜず、節季難儀をすくわんが為に思案尽くし畢ぬ。

豊歳諸人在家

方時 儉約自然 正直二十三品⁽¹⁾

「只一向に農作すべし」「百姓の安心 この一紙に至極せり」などという言葉と思わず顔をほころばせてしまうような説示が連なる『百姓一枚起請文』からは、人々の日々の生活において『一枚起請文』の教え、すなわち、お念仏の日暮らしがいかにかに根を張っていたのかを容易に知ることができるのです。

かつて野田秀雄氏は、伊藤祐晃氏の所論を増補して、『一枚起請文あらかると』を刊行し⁽²⁾、その中で七種類の『一枚起請文』の擬古文を紹介されています。この『百姓一枚起請文』の

発見によって、その擬古文は次のような八種類になりました。いかに『一枚起請文』が、多くの人々によって読み慣わされ、人口に膾炙かいしやされていたか、リズム感にあふれ、模倣するに足る名文であったかが知られるのです。

擬古文の名称	作者	結文
『飲酒一枚起請』 『茶の湯一枚起請文』 『俳諧一枚起請』 『商人一枚起請文』	尊朝法親王 千利休 (不明) 手島堵庵	只一向に酒を飲べし。 只一向に湯を沸かすべし。 たゝ一興にはいかいすへし。 たゝ一向に実義を以て面々の家業を大切に勤め心の内にかへりみて、耻ることなき様にせらるべし。 唯だ一向に働くべし。 たゝ一向によみならふべし。 唯一向に活動すべし。 只一向に農作すべし。
『渡世一枚起請文』 『和歌一枚起請文』 『哲学一枚起請文』 『百性一枚起請文』	孤立大我 小沢戸庵 井上円了 (不明)	

3、浄土宗僧侶の使命―『一枚起請文』と五重相伝会―

こうした『一枚起請文』の広まりに大きな役割を果たしたのであろう背景の一つに五重相伝会（化他五重・結縁五重）の普及が挙げられるでしょう。伝宗伝戒道場はもちろん、五重相伝会中の要偈道場においても、伝灯師による「浄土真宗吉水正流安心相承伝法道場儀軌九則」に入る直前、左脇師が聖聰上人説・了暁上人記になる次の『安心請決略抄』を拝読し、受者に説き聞かせます。

問うて曰く、念仏申すに付ては、安心相伝の大事と言ふことこれあり。若しこの大事を相伝せざる者は、往生すべからざるか。若ししからば上人の南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の子細候わずとのたまえるを、いかが心得候らん。

答えて曰く、本より浄土宗に勧むるところは下根最劣の凡夫、一文不知の愚痴の輩を勧めて、汝念仏申して極楽に往生せよと教うるるとき、さては念仏せば極楽へまいり候わんずる。あな貴や南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏と申す許りの者を本願の正機と言ふなり。この外に安心も起行も別の子細なきなり。有智無智みなこの機になれと教え、

この機にならんとはいふなり。

今、相伝と言うはかくの如く様もなく申せば往生す。これ私の料簡にあらず。凡夫の計らいにあらず。即ち弥陀の本願なり。釈尊出世して説き現し給う。乃至今日まで師資相承して異途なき旨を顕わしてこれを相伝と言うなり。所詮当流の相伝を豎に談じ横に学すといえども、**一枚起請**に習い収むる。これを故実となす。これ至要なり。義趣を軽んずることなかれ。聊爾りようじにこれを談ずべからずの状、件の如し。沙門了暁在御判（『浄土伝灯輯要』七九頁）

浄土宗七祖・聖岡上人によつて創唱・構築された五重相伝をただお一人相伝された八祖・聖聰上人は、この『安心請決略抄』において、「上人の（南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候わず）とのたまえるを、いかが心得候らん」あるいは「一文不知」「別の子細」等と述べているように『一枚起請文』に基づくお念仏の教えを最重要視し、「所詮当流の相伝を豎に談じ横に学すといえども、一枚起請に習い収むる。これを故実となす。これ至要なり」と五重相伝会の内容をどこから論じようとも『一枚起請文』の教えに収斂しゅうれんされると結論付けているのです。

言うまでもなく五重相伝会は、浄土宗の檀信徒を中心に七日間あるいは五日間にわたり菩提寺において各種法要を勤め、亡き方への猥ろな回向を重ね、尊い勸誡（法話）を聞いて念仏信仰を育む道場であり、成満された方には念仏者の証として誉号が授けられます。中には、再伝・三伝等といった複数回にわたって五重相伝会に入行される方もおられます。そこでは、聖聰上人のお言葉のように、『一枚起請文』の「ただ一向に念仏すべし」という浄土宗の教えが体系的に説示され、幾度となく『一枚起請文』が唱和されます。すると受者の方々は、浄土宗僧侶と同じように知らぬ間に『一枚起請文』を暗誦できるようになり、自ずと念仏者が育まれていくのです。こうした先人達による布教伝道の賜物としての『一枚起請文』の力強い広まりこそ、『一枚起請文』の各種擬古文成立の背景であることは間違いないありません。今に生きる私達浄土宗僧侶は、あらためて『一枚起請文』の教えを一人でも多くの方々に布教伝道する使命を肝に銘じなければいけないでしょう。

そこで本稿では、先学による『一枚起請文』の各種研究を踏まえつつ、法然上人のご法語と共に、その思想の集大成としての『一枚起請文』を解説していきます。その際、玉山成元氏や中野正明氏、安達俊英氏等が指摘されている『一枚起請文』伝来の系譜、すなわち、聖光上人系統と源智上人系統との大きく二系統に『一枚起請文』が伝承されてきたという点

を念頭におき、かつ、浄土宗教団の生命線とも言える二祖三代の伝灯や五重相伝の構築といった視点を踏まえて、『一枚起請文』の成立とその意義についての考察も加えていきます。なお本稿では、紙面の都合上、『一枚起請文』の真偽問題や諸本における文字の異同についての言及は控え、黒谷金戒光明寺本の説示に基づいて論を進めて参ります。

二、『一枚起請文』執筆の背景―『選択集』から『一枚起請文』へ―

1、『選択集』と『一枚起請文』―両者の同価値性について―

江戸時代の宗学者である義山上人は、『一枚起請弁述』の冒頭に次のように述べられています。

一枚起請は浄土一宗の肝要なり。先づ此宗の肝要は**『選択集』**に載せある也。三部経及び善導の四部八巻書の要文又は曇鸞・道綽・懷感・少康の諸釈の肝要なる文をば皆載せたり。それ故広くすれば**『選択集』**、縮むれば**『一枚起請』**也。縮めたりとて切て捨てたるものにはあらざる也。から笠大なりとて、はた、まわりを切て捨ることにはあらざる也。

すほめて小さくするなり。然ればひろげたるが『選択集』、すほめたるが『一枚起請』也。それ故開き立て、広く云へば二百座三百座にても尽きぬ也。縮めて云へば一口にて埒らちがある也。此処は縮めて合するが『一枚起請』の意也。元祖の広き智慧にて縮めて仰せられたるものなれば読むにも亦縮めて読み、合するにも縮めて合するがよき也。此意を知らずして説き様か粗相なりなじ抔云は悪き也。広き事が望ならば『選択集』にて云ふべき也。(浄全九卷一二三頁上段)

ここで義山上人は、法然上人の「広き智慧」によって「縮めて仰せられた」「浄土一宗の肝要」こそが『一枚起請文』であることを強調され、「此宗の肝要は選択集に載せある」ので、「広くすれば選択集、縮むれば一枚起請」「ひろげたるが選択集、すほめたるが一枚起請」と『一枚起請文』と『選択集』とが開合の異なりにあることを重ねて指摘し、「広き事が望ならば選択集にて云ふべき也」と、『一枚起請文』に説かれる内容を詳細に知りたいのであれば『選択集』を学ぶべきことを述べられています。このように義山上人は『一枚起請文』の解説を施すにあたり、わずか三百字程度の一文に、四度にわたって『選択集』の名を提示し、両者の深い関連性と同価値性について説き示されています。義山上人がお示しのよ

うに、『選択集』及び『一枚起請文』は、文言の広略こそあれ、その意趣は、「浄土三部経」と善導大師撰『観経疏』等の四部八巻の肝要を抽出統合し、さらには、曇鸞大師・道綽・懷感・懷感禪師といった浄土教祖師による著作の要義を加味し、幾多の思索を積み重ねて、体系的に選択本願念仏の意義を説き明かすという一点に共通した著作と言えるのです。⁽¹⁰⁾

2、『選択集』から『一枚起請文』へ―思想の展開―

その一方、聖光上人と源智上人の両系統の基となったであろう『一枚起請文』本文の成立が、聖光上人が鎮西に帰る元久元（一二〇四）年から建暦二（一二二二）年までとした場合、『選択集』が成立した建久九（一一九八）年と『一枚起請文』の両者には、六年から十四年という時間的隔たりがあり、その間に法然上人を取り巻く状況は、次のように否応なく移り変わっています。まずもって、ご自身が確立し、『選択集』において説き明かされた選択本願念仏思想、すなわち、弥陀・釈迦・諸仏三仏同心になる仏説「浄土三部経」と弥陀化身善導による弥陀直説としての『観経疏』との有機的統合からなる仏の側（仏辺）からなる称名念仏の絶対的な価値付けについては微塵の揺るぎもありません。それに対して、衆生の側（機辺）で具え、実践すべき、安心（三心）や作業（四修）等を誤って受けとめてしまった

門下の異義・邪義と、そこから引き起こされることとなった専修念仏教団への弾圧、ひいては、選択本願念仏思想の存続危機という許容せざる事態が勃発するのです。そして、それこそが『一枚起請文』執筆の内的動機であると推定されます。

法然上人は、建久八（一一九七）年から翌年にかけて、大病を患い、念仏三昧を発得されました。そして、建久九年春三月、九条兼実公による執筆要請を契機として、畢生の著作である『選択集』を撰述されました。『選択集』撰述の翌月には弟子達に向け、自身没後の対応について細かく指示した『没後制誡』を執筆されていることから、『選択集』が身命を賭した著作であったことが知られます。

ところが、『選択集』撰述以降、本願念仏の教えが広まり、順次教線が拡大していくと、次々と専修念仏教団への弾圧が引き起こされることとなります。すなわち、元久元（一二〇四）年、法然上人七十二歳の時、延暦寺の衆徒が専修念仏の停止を真性座主に訴え出たことに端を発し、法然上人が『送山門起請文』を座主に提出し、『七箇条制誡』を門弟一九〇名に署名させる事態となった元久の法難。翌元久二年、興福寺の貞慶上人が中心となって専修念仏の失を九箇条にまとめ、八宗同心の訴訟として提出した『興福寺奏状』をはじめとする各宗寺院等による断続的な専修念仏教団への威圧。翌建永元（一二〇六）年、鹿ヶ谷におけ

る六時礼讃法会に端を発する住蓮上人・安樂上人の処刑から、翌承元元（一二〇七）年、法然上人の四国配流に至る建永の法難。さらには、その年の十二月から建暦元（一二一一）年十一月に至る四年に及ぶ摂津勝尾寺での法然上人の逗留。このように法然上人にとって、その晩年が実に多難であったことが確認できます。

言うまでもなく、法然上人の透徹した人間観に基づいて開顕し、体系化された選択本願念仏思想そのものに他宗を軽んじたり、貶める意図などありません。^{おとし}にもかかわらず法然上人とその浄土宗教団が弾圧を蒙るのは、法然上人ご自身が『七箇条制誡』や一連の「一念義停止起請文」において厳しく戒められているように、法然上人の教えを誤って受けとめてしまった弟子達による軽率な行動、すなわち、他宗への誹謗中傷や造悪無碍な振る舞いにこそ求められます。⁽¹¹⁾そうした視点から『一枚起請文』を振り返ってみると、その添え書きに記されている「滅後の邪義をふせがために所存をしるし畢んぬ」という一節にあらためて注目せざるを得ません。すなわち、表面的には、法然上人滅後に邪義が惹起することを恐れるという体裁を示してはいるものの、添え書きによる誡めは、すでに法然上人在世中に広まりを見せていた邪義に対する誡めであり、『一枚起請文』の本文こそが、そうした邪義に対する回答の心を踏まえてしたためられた書に他ならないということを推測できるのです。

法然上人の門下は、四流・五義四門徒、あるいは、十五流・二十四流等と呼ばれ、それぞれが「我こそは法然上人の正統を継承する者」と主張していました。そんな中、聖光上人の弟子である良忠上人と、源智上人の弟子である信慧上人とが、京都東山の赤築地^{あかつじ}において四十八日間にわたり、それぞれが継承された教えについて照合する法談を持ち、その結果、互いの教えに相違がなかったことから、両者が合流されていきます。赤築地の法談において、両者に継承された教えの同一なることを証明するにあたり、大きな役割を果たした法然上人のご遺文こそ、良忠上人と信慧上人がそれぞれの師から授かっていたであろう、法然上人から聖光上人・源智上人へと伝承された『一枚起請文』の説示内容に他ならなかったことでしょう。両系統の『一枚起請文』は、それを授けられた年代の相違はもちろん、文字の脱入など、細かい箇所での異なりこそあれ、「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし⁽¹²⁾」という、念仏相統を最重要視する一点においては、なんら違うことがなかったからです。そうしたことから法然上人の正しい教えを伝持してきた両流が時代を超えて統一されることとなるのは必然であり、その結果、現在に連なる浄土宗の大きな潮流となって、その教線を広げていくこととなるのです。

三、『一枚起請文』の心―ただ一向に念仏すべし―

本節では『一枚起請文』について本文を六段、添え書きを加えて全七段に分け、その撰述背景や法然上人の思想変遷、さらには、二祖三代の教学や五重相伝との関わりを念頭に、法然上人が遺された各種ご法語を交えて解説していきます。

第一段 観念と称念と―法然上人による仏教の転換―

【原文】唐土我朝に、もろもろの智者達の沙汰し申さるる、観念の念にもあらず。

〔現代語訳〕私、源空が説いてきたお念仏は、み仏の教えを深く学んだ中国や日本の高僧方が理解して説かれてきた、心を静めてみ仏の姿を想い描く観念のお念仏ではありません。

1、選択本願念仏説の確立

本段と次段において法然上人は、浄土宗のお念仏がこれまで説かれてきた種々の念仏と根本的に異なっていることを明示されます。

インド・中国・日本へと仏教が東漸・伝播し、浄土教、特に阿弥陀仏信仰が僧俗を問わず

広く浸透するに及んで、拡大していた念仏の対象が西方極楽浄土の救主たる阿弥陀一仏へと次第に収斂され、多様化していた念仏の目的もその浄土への往生を第一義とするように整理されていきます。そうした念仏思想の一つの集大成が、恵心僧都源信撰『往生要集』でありましょう。『往生要集』において恵心僧都は、念仏を説くにあたり、①仏の相好を個々に観想する別相観、②仏身全体を総括的に観想する総相観、③仏の眉間にある白毫相に集中して観想する雑略観の三種類の観想の念仏を説き、浄土往生への肝要として人々に説き勧められます。一方、「もし相好を観念するに堪えざる者あらば」（浄全一五卷八五頁下段）と説示されるように、称名念仏はどこまでも観念の二次的・副次的な立場に抑えられていました。

法然上人は、『往生要集』に導かれつつも、観念を主として位置付けてきた念仏理解の潮流を称名へと大きく舵を切り、善導大師の思想を拠り所として立教開宗を果たされました。さらに、極楽浄土の救主である阿弥陀仏ご自身が、浄土往生の行として、他ならぬ称名念仏一行だけを選び取って（選択）、その誓願（本願）とされ、釈尊も諸仏も同調されているという選択本願念仏思想を確立されました。

建久八（一一九七）年、自身の草庵を訪れた聖光上人に対して法然上人は、「そなたは天台宗の教えを学んできた者なので、三重の念仏について伝えよう」と述べ、次の三種の念仏

について説き明かされます。すなわち、①『摩訶止観』の念仏（さとり境地に至る修行を補助するための念仏）、②『往生要集』の念仏（浄土往生を目指すものとはいえ、阿弥陀仏の相好等を観想することを主とする念仏）、そして、③善導大師が立てられた念仏（阿弥陀仏の本願に基づく称名念仏）です。法然上人が昼過ぎから深夜に至るまで十時間以上かけて、自身の勧奨するお念仏がいわゆる天台宗という観念の念仏ではないことを懇ろに説き伝えられた結果、聖光上人は浄土宗に帰依し、後に浄土宗二祖となられ、今も本願に基づく称名念仏の流れは脈々と続いているのです。

2、念仏の種々相

法然上人が浄土宗を立教開宗されてから八五〇年が経ち、今でこそお念仏と言えば、称名念仏があたり前のようになっていますが、前述したように法然上人在世当時は決してそうではありませんでした。そもそも念仏は、仏の姿やその功德を思い描きながら観想することが中心であったからです。

江戸時代、懷音上人によって編纂された『諸家念仏集』には、律宗念仏・法相念仏・三論念仏・禅宗念仏・華嚴念仏・真言念仏・天台念仏といった各宗で説かれる念仏が広く紹介さ

れた後、蓮宗念仏として浄土宗のお念仏が説かれます。本書では、これらの念仏を次の四種に整理しています。

① 観仏相好門―応身の三十二相や報身の八万四千相好といった仏の姿を観想する念仏

② 観仏法身門―仏が体得した法身や衆生が本来具えている法身といった真理そのものを想念する念仏

③ 有相称名門―仏の浄土を欣い求めて、ただひたすらその仏の名号を称える念仏

④ 無相称名門―仏の浄土を欣い、その仏の名号を称えるものの、その仏や浄土の究極は空であると捉える念仏

その上で、懷音上人は次のように述べられます。

今、宗に勧むる所の念仏とは相好を観ずるに非ず。法身を念ずるに非ず。又、無相の称念に非ず。唯是れ有相単信の称名なり。（浄全一五卷七七一頁上段―下段）

（現代語訳 今、浄土宗で勧めている念仏は、阿弥陀仏の姿を観想する念仏（①観仏相好門）でもなく、法身（真理）そのものを観想する念仏（②観仏法身門）でもなく、姿・形のない仏を称念する念仏（④無相称名門）でもありません。姿・形を具えた阿弥

陀仏をただひたすら信じ、その名号を称える有相単信の称名念仏（③有相称名門）です。）

このように浄土宗のお念仏は、③「有相単信の称名」念仏であると指摘されています。本段において法然上人が「私が説いてきたお念仏ではない」と指摘しているのは、『諸家念仏集』における四種の念仏の分類で言えば、主に①観仏相好門や②観仏法身門の念仏が該当すると推察されます。

3、称名念仏と観想念仏

本段でいう「観念の念」と称名念仏の理解をめぐり、法然上人は多くのご法語を遺されていますが、その一端を紹介していきます。

念仏は仏の**法身**を観ずるにもあらず、仏の**相好**を観ずるにもあらず。ただ心をひとつにして、もはら弥陀の名号を称するを、これを念仏とは申すなり。かるがゆえに称名とはなづけて候なり。（『大胡の太郎実秀が妻室のもとへつかはす御返事』昭法全五〇八

頁)

(現代語訳 お念仏は、心を静めて仏の内に宿る常住不変の真理を観想するものでもなく、心を静めて仏の妙なる姿・形を観想するものでもない。ただひたすら心を寄せて、専ら阿弥陀仏の名号をお称えする、これをお念仏というのです。こうしたことから称名念仏と名付けられているのです。)

ここで法然上人は、仏の法身や相好を観ずる念仏ではなく、ひたすら阿弥陀仏の名号を称えるお念仏を説き明かしているとお示しです。

善導は「色相等の観法」をば、観仏三昧と云えり。称名念仏をば、念仏三昧と云えり。恵心は称名・観法合して念仏三昧と云えり。(中略)然りと雖も真実の底の本意は、称名念仏をもて、専修専念を勧進したまえり。善導と一同なり。『十七條御法語』昭法全四七一頁

(現代語訳 善導大師は、静めた心にありありと仏のお姿を心に想い描く行を観仏三昧と仰り、ただ仏の名号を称えるお念仏を念仏三昧と仰いました。恵心僧都は仏の名号を

称えるお念仏と、仏のお姿を心に想い描く行と二つとも念仏三昧であると仰いました。
(中略) しかしながら恵心僧都の真のお心は仏の名号を称えるお念仏を専ら修めるよう
にお勧めになられたのです。そのお心は善導大師とまったく同じです。)

ここで法然上人は、善導大師と恵心僧都の真意が、共に観想念仏ではなく、称名念仏である
ことをお示しです。

こうしたご法語において法然上人は、ご自身の説くお念仏が、仏の相好や法身を観想する
念仏ではないことを明言されているのが分かります。

4、観想念仏と称名念仏の難易

次に、末代の衆生にとって、観想念仏の成就是困難であり、だからこそ称名念仏を相続す
べきことを勧める一連のご法語です。

永観ののたまわく、真言止観は理ふかくして、さとりがたく、三論法門は、道かすかに
して、まどいやすしなんと候。まことに観念もたえず、行法にもいたらざらん人は、

浄土の往生をとげて、一切の法門をも、やすくさとらせたまわんは、よく候なんとおぼえ候。（『要義問答』昭法全六一六頁）

（現代語訳 永観律師は、「真言や止観の教行は奥深いがために覚り難く、三論や法相の教えはおよそ理解の見通しも立たず、惑いやすいものである」と仰っています。私、源空はこの言葉を「まこと静めた心に仏のお姿などを思い描く観念にも堪えられず、三論や法相の修行をまっとうすることもできない人は、浄土への往生を遂げて、そこであらゆる教えをたやすくお覚りになるのがよい」との意味に受け取っています。）

ここで法然上人は、永観律師の言葉を引用しつつ、観念などの行を成就することが困難であることをお示しです。

近来の行人観法をなす事なかれ。仏像を観ずとも運慶・康慶がつくりたる仏ほどだにも、観じあらわすべからず。極楽の莊嚴を観ずとも、桜・梅・桃・季の花菓ほど、観じあらわさん事かたかるべし。ただ彼の仏、今現に世に在して成仏したまえり、まさに知るべし本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生を得の釈を信じて、ふ

かく本願をたのみて一向に名号を唱うべし。名号をとなうれば、三心おのずから具足するなり。（『つねに仰せられける御詞』昭法全四九四頁。『十七條御法語』昭法全四六八頁にも同趣旨のご法語が伝えられる。）

（現代語訳 近頃の修行者は、静めた心で極樂の様子や阿弥陀仏の姿を思い描く修行をする必要などありません。仏の姿を心に思い描いたとしても、あの名高い仏師、運慶や康慶が彫り上げた仏像よりもはつきりと思い描くことなどできようはずありません。極樂のあり様を思い描こうにも、現実の桜や梅や桃や李の花や実ほどにはつきりと思い描くことは難しいものです。ただ『往生礼讃』において善導大師が「阿弥陀仏は、今現に仏となつて西方浄土にましますのだから、その誓いに建てた本願が虚しかろうはずがない。衆生が阿弥陀仏の名号を称えれば、必ず往生が叶うのである」と示された解釈を信じて、その本願を深く頼みとしてひたすら名号を称えるべきです。名号を称えれば、三心は自ずと具わるものです。）

ここで法然上人は、同時代に活躍された運慶・康慶が造立した仏像等を引き合いに出した上で、末代に生きる私達には観想念仏の成就是困難であり、だからこそ本願に基づく称名念

仏を相續すべきことを述べられています。

善導のたまわく、相を觀ぜずして、ただ名字を称せよ。衆生障り重くして、**觀成ずる事**
かたし、このゆえに大聖あわれみて、称名をもはらにすすめたまえり。心はかすかに
して、神たましい十方にとびちるがゆえなりという。（『要義問答』昭法全六三一頁）

（現代語訳 『往生礼讃』において善導大師は「静めた心に仏の姿を思い描く觀念の念仏
はせずに、ただ阿弥陀仏の名号を称えよ。衆生は煩惱に重くのしかかれ、そのような
觀念をまつとうすることなど出来ない。だからこそ釈尊は、私達衆生を哀れんで称名念
仏だけを衆生に勧められたのである。なぜなら、衆生の心は弱々しく、あちらこちらへ
飛び移るものだからである」と仰っています。）

ここで法然上人は、『往生礼讃』の一節を引用して、觀想念仏の困難なことを示しつつ、
だからこそ釈尊は称名念仏を私達に勧められたのだと述べられます。

いましばらく自法につきてこれをいわば、まさにいま定善の觀門は、かずかずにつらな

りて十三あり。散善の業因は、まちまちにわかれて九品なり。その定善の門にいらんとすれば、すなわち意馬あれて六塵の境にわす。かの散善の門にのぞまんとすれば、

又心猿あそんで十惡のえだにうつる。かれをしずめんとすれどもえず、これをとどめんとすれどもあたわず。いま下三品の業因を見れば、十惡五逆の衆生、臨終に善知識にあって、一声十声阿弥陀仏の名号をとなくて、往生すとかれたり。これなんぞわれらが分にあらざらんや。（『登山状』昭法全四二一頁）

（現代語訳　今しばらく、浄土宗の教えにしたがつて往生の行について述べるならば、まさに今述べたように定善の觀察行はそれぞれ連なつて十三あり、散善の行はそれぞれ独立して九つに分かれています。もし、私達がその定善という門に入ろうとしたならば、すぐさま心は荒馬のように暴れ回り、欲望を掻きたてる六塵の境界を駆け回ることでしょう。もし、私達がその散善の門に臨もうとしたならば、また心は片時も落ち着かない猿のように遊び回り、木の枝を飛び移るように次々と十惡を犯し続けることでしょう。駆け回る馬を静めようにも叶わず、飛び移る猿を抑えようにも叶いません。ところが今、九品の中、下品に説かれる往生のための行をみれば「十惡や五逆を犯した衆生でも、臨終に善知識に遇つてその勧めにしたがい、たとえ一声や十声であつても阿弥陀仏の名号

を称えるならば極樂浄土への往生が叶う」と説かれているのです。これが、私達のような分際にふさわしい教えでないことなどどうしてありましょうか。）

ここで法然上人は、揺れ動く心（意馬心猿）をもった私達凡夫には、観想念仏に該当する定善の行を成就することはおろか、散り乱れる心であっても修められる散善の行でさえ成就することは困難であると指摘した上で、称名念仏の相続を促しておられます。

こうした一連のご法語において法然上人は、観想念仏を成就することの困難さを訴え、だからこそ阿弥陀仏が大いなる慈悲の心をもって称名念仏を浄土往生の行として本願に誓われたのであり、私達凡夫は阿弥陀仏の仰せのままに称名念仏を相続すべきである、と述べられるのです。

5、称名念仏の専修

さらに法然上人は、称名念仏と観想念仏の併修ではなく、称名念仏の専修を次のご法語において促されています。

ある人問うていわく、色相観は観經の説なり。たとい称名の行人なりというとも、これを観ずべく候か、いかん。上人答えての給わく、源空もはじめはさるいたずら事をしたりき。いまはしからず、但信の称名なりと。（『乘願上人伝説の詞』昭法全四六六頁）（現代語訳 ある人が「静めた心に阿弥陀仏のお姿や極楽浄土の莊嚴を想い描く觀察の行は、『観無量壽經』の説くところだ。たとえ称名念仏の行者であっても、そうした觀察の行を修めるべきでしょうか、いかがでしょう」と質問しました。それに対して法然上人は「私、源空もはじめはこうした無益なことをいたしました。今はいたしません。ただひたすら阿弥陀仏の本願を信じてお念仏を称えるばかりです」とお答えになりました。）

ここで法然上人は、ご自身の体験を踏まえて、出来もしない観想念仏を併修するのではなく、称名念仏の専修を促されています。

或る時、鎮西より来たれる修行者、上人に問い奉りて云わく。称名の時、心を仏の相好に係くる事は、如何様にか候べき。上人、いまだ言説せざる前に傍らの弟子、然るべ

し。云々。上人云わく。源空は然らず、唯、若し我れ成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称して、下十声に至るまで、若し生ぜずんば正覚を取らじ。彼の仏、今、現に世に在して成仏したまえり。当に知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生を得と思ふ許なり。我が分際を以て仏の相好を觀ずとも、さらに如説の觀にあらず。深く本願を憑みて口に名号を唱える。

唯是の一事のみ、仮令の行にあらず。修行者、

悦びて退出し畢ぬ。（『二期物語』昭法全四四二頁。『称名の一行を勧むる御詞』昭法全四八二頁、『鎮西修行者との問答』昭法全七一四頁、『信空上人伝説の詞 其一』昭法全六七〇頁にも同趣旨のご法語が伝えられる。）

（現代語訳 ある時、九州から来た修行者が法然上人に「お念仏を称える時、心を静めて仏のお姿を想い浮かべなさいといいますが、どのようにお考えでしょうか」と質問しました。すると、上人がまだ何も仰せにならないうちに、傍らにいた弟子が「そのようにすべきです」と答えました。しかし上人は「私はそうは思いません。『往生礼讃』において善導大師は（阿弥陀仏は、もし私が仏となった時、あらゆる世界の衆生が、わが名を称えることわずか十遍であつても、もし往生しなければ、決して仏とはならないと誓われた。阿弥陀仏は今現に極楽にいらつしやり、仏とならている。まさに慈悲深い

誓願が確かに叶えられていることを知るがよい。衆生が念仏すれば必ず往生が叶う」と解釈され、私も、ただそのように思うばかりです。この私ごときの分際で、心を鎮めて仏のお姿を想い浮かべたところで、経典に描かれた通りに想い浮かべることなどできません。阿弥陀仏の本願に心底おすがりし、口に〈南無阿弥陀仏〉と称える、ただこの一つの事こそが、唯一かりそめでない行なのです」と仰いました。修行者はその言葉に心救われて帰って行きました。）

ここで法然上人は、称名念仏を相続するにあたり、阿弥陀仏を想念する必要があることをお示しです。

このように法然上人は、いわゆる無観称名の実践、称名念仏の専修を促されていることが分かります。

6、勝易念仏の成立―勝劣・難易の二義―

『選択集』第三章において法然上人は、阿弥陀仏が本願選定の際、善妙を選取し、粗悪を選捨されたという取捨の姿勢こそ「選択」であるとし、阿弥陀仏が浄土往生行として称名念

仏を本願に据えた理由として、次のような阿弥陀仏の聖意に基づく勝劣・難易の二義を提示されました。

称名念仏

|| 易行 || 勝れた功德 ↑ 阿弥陀仏の他力が及ぶから

諸行（含、観念の念仏） || 難行 || 劣った功德 ↑ 自力の功德に限定されるから

こうした図式は、阿弥陀仏の常識（仏辺）に基づく行の価値判断であり、ここに法然上人は、「易」なるが故に最底辺に位置づけられていた称名念仏を仏教界の表舞台に引き上げ、称名念仏の「ひとりだち」（『禅勝房伝説の詞』昭法全四六二頁）を実現されたのです。勝劣・難易の二義に基づく法然上人による称名念仏の提唱は、出家僧侶中心のそれまでの仏教から、阿弥陀仏の前では出家僧侶も在家信者もすべて平等であるという民衆主役の仏教への大転換でもあったのです。⁽¹³⁾

こうした観称勝劣をめぐって、『四十八卷伝』等の諸伝記において、法然上人が比叡山西塔黒谷におられた頃、師叡空上人との間で交わされた次のような問答が伝えられています。

あるとき上人往生の業には、称名にすぎたる行、あるべからずと申さるるを、慈眼房は、観仏すぐれたるよしをの給いければ、称名は本願の行なるゆえに、まさるべきを

たて申したもうに、慈眼房、又、先師良忍上人も、**観仏すぐれたり**とこそおおせられしかとの給いけるに、上人、良忍上人も、さきにこそうまれ給いたれと申されるとき、慈眼房腹立たしたまいければ、善導和尚も、上来、定散両門の益を説きたもうと雖も、仏の本願に望むれば、意衆生をして、一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り、と釈したまえり。**称名すぐれたり**ということあきらかなり、聖教をばよくよく御覽給わでとぞ申されける。(『叡空上人との問答 其二』昭法全七二六頁。『叡空上人との問答 其二』昭法全七二七頁、『叡空上人との問答 其三』昭法全七二七頁にも同趣旨のご法語が伝えられる。)

(現代語訳 ある時、比叡山で修行されていた法然上人が「往生のための行業で、称名念仏に勝るものはありません」と申し上げると、師匠の慈眼房叡空上人は、静めた心に仏のお姿や極楽のありさまを思い描く観想の念仏こそが勝れている旨を話されました。それに対し法然上人が「称名念仏は阿弥陀仏が本願に誓われた行ですから、他のいかなる行よりも勝れているのです」と申し上げると、叡空上人は「我が師匠、良忍上人も、観想念仏が勝れていると仰せであった」と仰いました。そこで法然上人が「良忍上人とはおっしゃいますが、私達よりも先にお生まれになっただけではありませんか」と申し

上げると、叡空上人はいよいよ立腹なさいました。すると法然上人は、さらに「善導大師も『観経疏』に〈『観経』には定善と散善との二つの行が説かれているが、阿弥陀仏の本願に照らし合わせてみると、釈尊の本意は、あらゆる衆生にただひたすら阿弥陀仏の名号を称えさせることにあったのだ〉と解釈されています。このように、称名念仏の方が勝れていることは明らかです。経論を十分にお読みいただければ…」と申し上げました。」

このように法然上人は、師叡空上人と観称勝劣を議論し、観想念仏が劣行であり、称名念仏が勝行であると主張されたと伝えられています。

こうした観称勝劣に言及された法然上人の一連の教義書を整理すると次のようなことが分かります。まず最初期の著述と考えられる『往生要集詮要』⁽¹⁴⁾には、「観念と称念と勝劣あり難易あり。即ち観念は勝れ、称念は劣なり」(昭法全五頁)と、観想念仏と比較して称名念仏は劣った行であることを明示し、難易に約して易行なる称名念仏を時機相應の行として勧奨していることが分かります。また、東大寺講説「三部経釈」や『逆修説法』など、『選択集』以前に成立した一連の著作を見ても、称名念仏こそが選択本願行として勝・易の行であ

り、観想念仏を含めた諸行が劣・難の行であることを明言されている説示を見出すことはできません。まさに『選択集』において、はじめて勝劣・難易の二義が成立していることが分かるのです。このようにお念仏と諸行をめぐる勝劣・難易の二義は、四十三歳で本願念仏の教えに回心された法然上人が六十六歳の『選択集』撰述に至るまでの二十年以上に及ぶ深い思索を経た結果、明らかにし得た教えであり、これまでの仏教界の支配的常識を一八〇度覆す画期的な思想と言えるのです。⁽¹⁵⁾

以上、『一枚起請文』冒頭の一節は、正に法然上人が『選択集』において到達した結論に他ならないとも言えるのであり、数多くのご法語において広く人々に説き伝えられた教えの詮要に他ならないのです。ところが、その教えを自身の都合の良いように曲解して、念仏相續を軽んじ、ひいては造悪無礙を主張する輩が現れてしまう事態となるのです。

第二段 学問のための念仏か、念仏のための学問か

【原文】また学問をして、念の心を悟りて申す念仏にもあらず。

〔現代語訳〕また、み仏の教えを学びとることによって、お念仏の意味合いを深く理解した上で称えるお念仏でもありません。

1、「念の心を悟りて申す念仏」とは

前段と本段において法然上人は、浄土宗のお念仏がこれまで説かれてきた種々の念仏と根本的に異なっていることを明言されますが、本段では、自身の勧めるお念仏が、多くの祖師方によるさまざまな解釈に基づき、そうした理解を必要とするようなお念仏ではないことを主張されます。

法然上人の脳裏には、多くの解釈が念頭にあったことでしょう。例えば、『無量寿経宗要』において新羅の元曉法師は、『弥勒発問経』の所説に基づいて、初地以上の菩薩が修める隠密義の十念として、①慈心を生ず、②悲心を起こす、③護法心を生ず、④決定心を生ず、⑤深心清浄、⑥一切種智心を生ず、⑦尊重心を起こす、⑧味著心を生ぜず、⑨種種善根因縁を起こす、⑩正念に仏を観ず、という一念毎に異なる対象を設定する十念の解釈を提示しており（慈等の十念、浄全五卷八三頁上段～下段）、法然上人も深く学ばれていたことでしょう。この他、法位・義寂・遵式等も独自の十念の理解を展開しています⁽¹⁶⁾

法然上人は、最初期の著作と考えられる『浄土初学抄』において華嚴・天台・三論・法相・地論・撰論・大乘律・真言・成実・俱舍・四分律の都合十一宗について、各宗の章疏名を挙げて浄土教との関連について整理を施されています。そうしたことから、智慧第一と

讃えられた法然上人が、前段において紹介した『諸家念仏集』において説示される律宗念仏以下の七宗で解釈される念仏に精通していたことは明らかです。

2、「無智の者のための教え」という憶測

言うまでもなく法然上人によるお念仏の教えは、一切衆生を平等に救済する教えであり、前述したような高度な教えの理解を必要条件として要求するものではありません。しかし、「智慧第一と讃えられる法然上人ほどの方が、誰にでも修められる称名念仏を真実の教えとして説くはずはなく、それはどこまでも無智の者に対して説かれた方便の教えに過ぎない」などという憶測がまことしやかに吹聴されていたようです。そうした憶測に対して法然上人は、次のように述べられます。

念仏の行は、もとより有智無智にかぎらず、弥陀のむかし誓いたまいし本願も、あまねく一切衆生のためなり。

無智のためには念仏を願じ、有智のためには余のふかき行を

願じたまえる事なし。十方衆生のために、ひろく有智無智、有罪無罪、善人悪人、持

戒破戒、貴きも賤しきも、男も女も、もしは仏在世、もしは、仏滅後の近來の衆生、も

しは釈迦の末法万年ののち、三宝みなうせての時の衆生まで、みなこもりたるなり。

〔『津戸の三郎へつかはす御返事（九月十八日付）』昭法全五〇一頁〕

（現代語訳　そもそもお念仏の行は、智慧のある人ない人にかかわるものではありません。阿弥陀仏がその昔、法蔵菩薩として修行されていた時にすべての人々を漏れなく救おうとして誓われた本願の行です。ですから、智慧のない人のためにお念仏を本願の行とされ、智慧のある人のために他の深遠な行を本願の行とされたわけではありません。すべての人々のためであり、それには広く智慧のある人もない人も、罪のある人もない人も、善人も悪人も、戒を守る人も守れない人も、身分の高い人も低い人も、男性も女性も、釈尊がいらっしゃった時代の人も入滅された後の人も、さらには末法の時代が過ぎて仏法僧の三宝がみな滅んでしまうであろう時代の人々も、すべてが含まれるのです。）

無智の人にこそ、機縁にしたがいて念仏をばすすむる事にてはあれと申し候なる事は、

もろもろの僻事にて候。阿弥陀ほとけの御ちかいは、有智無智をもえらばず、持戒破戒をもきらわず、仏前仏後の衆生をもえらばず、在家出家の人をもきらわず、念仏往生

の誓願は平等の慈悲に住しておこし給いたる事にて候えば、人をきらう事は、またく候わぬなり。されば觀無量壽經には、仏心と者大慈悲是なりと説きて候なり。（『津戸三郎へつかはす御返事（九月二十八日付）』昭法全五七一頁）

（現代語訳 「智慧のない人にこそ、その人の能力や因縁に応じてお念仏を勧めているのだらう」などと言われているのはすべて間違いです。阿弥陀仏のお誓いは智慧のある人もない人も選ばず、戒律を守る人も守れない人も嫌うことなく、また釈尊のいらつしやった時代の人も入滅後の時代の人も選ぶ事もなく、在家出家を嫌うこともなく、念仏往生の誓願はあらゆる人々への平等の慈悲の御心から発されたのですから、人を分け隔てするなどということは決してありません。『觀無量壽經』に「仏心とは大慈悲これなり」と説かれている通りです。）

このように法然上人は、「無智の者のためにお念仏を説いている」という憶測を厳しく戒め、智慧のあるなしは念仏往生に一切関わりないことを明言しておられます。

3、念仏相続を軽んずる者への戒め

いずれにしても法然上人が、あえてこの一段を説き示さざるを得なかった背景を求める必要があるでしょう。前述したように、『一枚起請文』の添え書きにある「滅後の邪義をふせがんがために所存をしるし畢んぬ」という一節は、表面的には、法然上人滅後に邪義が惹起することを恐れるという体裁を示してはいるものの、すでに法然上人在世中に門下による邪義は発生しており、『一枚起請文』の本文は、正にそうした邪義に対する回答の心を踏まえてしたためられた書に他ならないと考えられます。実際に門下である幸西等による一念義の主張が法然上人を悩ませていたことが、『四十八卷伝』第二九卷において次のように述べられています。

上人の弟子となり、成覚房幸西と号しけるが、浄土の法門を、元習える天台宗に引き入れて、迹門の弥陀、本門の弥陀という事を立てて、「十劫正覚といえるは、迹門の弥陀なり。本門の弥陀は、無始本覚の如来なるが故に、我等所具の仏性と、まったく差異なし。この謂を聞く一念に事足りぬ。多念の遍数、甚だ無益なり」と言いて、「一念義」という事を自立しけるを、上人、この義、善導和尚の御心に背けり。甚だ然るべからざ

る由、制し仰せられけるを、承引せずして、猶この義を興しければ、我が子にあらずとて、擯出ひんしゅつせられにけり。(聖典六卷四五三頁)

こうした説示から、法然上人在世時、すでに『無量寿経』や『阿弥陀経』に説かれる十劫正覚の阿弥陀仏は迹門に過ぎず、「無始本覚としての本門の阿弥陀仏と自身の内にある仏性とが同一である」という謂われを聞く一念によって救済が成立するなどという一念義の教えが説かれていたことが分かります。そして、そうした教えが「浄土三部経」に説示される阿弥陀仏や極楽浄土と大きく乖離してしまい、念仏相續を著しく軽んじるという結果を引き起こし、法然上人を悩ませていた様子も窺えます。すなわち、一念義が法然上人の説かれてきた選択本願念仏思想と根本的に異なる邪義であり、その教えを受けた者達による他宗への誹謗中傷や造悪無碍な振るまいが専修念仏教団に大きな被害をもたらしていたのです。そうしたことから法然上人は、『七箇条制誡』はもちろんのこと、次のように、いくつものご消息においてまことに厳しく一念義の主張を諷めていることが分かります。

罪をおそるるは本願をかりしむるなり、身をつつしみてよからんとするは、自力をは

げむなりという事は、ものもおぼえぬ、あさましきひが事なり、ゆめゆめ耳にも聞き

いるべからず、露塵ばかりも用いまじき事なり。（『示或人詞』昭法全五八八頁）

（現代語訳 「罪を犯しては往生できないと恐れるのは、阿弥陀仏の本願を信じ切っていないのだ」とか、「身を慎んで念仏するのが良いとするのは、自力を頼りに往生しようと努力しているのだ」などと言っているのは、物知らずで、まったく嘆かわしいばかりの誤りです。決して聞き入れることがあってはいけません。微塵も信用してはいけないことです。）

このように法然上人は、造悪無碍を肯定するような主張を強く誠めていることが分かります。

一念往生の義、京中にも粗流布するところなり。おおそ言語道断のことなり。（中略）かくのごときの人、附仏法の外道なり、師子の身の中の虫なり。またうたごうらくは、天魔波旬のために、その正解をうばわれるともがらの、もろもろの往生の人をさまたげんとするなり。あやしむべし。ふかくおそるべきものなり。（『越中国光明房へつ

かはす御返事』昭法全五三七頁)

(現代語訳 一念往生の義が、京の都にもだいぶ弘まっております。まったく言語道断のことです。(中略) そんなでたらめを弘める人は仏法に従っているふりをして正しい教えを妨げる悪魔であり、「獅子身中の虫」です。天魔波旬のしわざによって、教えを正しく理解することを妨げられた人々が、他の多くのお念仏の行者に支障を与えるのではないかと心配されます。本当にとんでもないことであり、実に恐ろしいことです。)

このように法然上人は、一念義の広まりを歎かれると共に彼等の主張を強く退け、正しい信仰を具えた念仏行者への悪影響を憂えておられます。

近来、一念のほかの数返無益なりと申す義、いできたり候よし、ほぼつたえうけたまわり候。勿論言うに足らざるの事に候か。文義をはなれて申す人、すでに証を得候か、いかん。もつとも不審に候。また ふかく本願を信ずるもの、破戒もかえりみるべからざるよしの事、これまた問わせたもうにも、およぶべからざる事か。附仏法の外道、ほかにもとむべからず候。(『基親の書信並びに法然の返信』昭法全五四九頁。『基親卿

に遣はす御返事』昭法全六〇八頁にも同趣旨のご法語が伝えられる。)

(現代語訳 近頃、「往生のためには一遍のお念仏で充分なのだから、一遍称えた後のお念仏はもう必要ない」などといった説が出てきていることは、おおむね伝え聞いております。もちろん、言うに足らないとんでもないことです。そのように言っているのは經典や論疏から離れて勝手なことを言っている人なのでしょうが、そう言える証拠でもあるのでしょうか。そんなはずはありません。まことに不審に思います。また「深く阿彌陀仏の本願を信じる人は戒律を破つても気にすることはない」などという説については私にお尋ねになるまでもありません。そんなことを言う人は仏法に従っているふりをして正しい教えを妨げる外道であり、他に例を見することもできません。)

このように法然上人は、一念義の主張を強く非難し、一念義が經典や論疏に基づかない教えであり、破戒を促すような主張は外道の教えに他ならないと訴えられます。

一念の後又称念せず。ならびに犯罪せば、なお決定往生と信ずべきにあらず。此の如く信じ候は、一重、深心に似たるといえども、還りて邪見と成り候歟。(『九条兼実の

問に答ふる書 其の二『昭法全六一〇頁』

（現代語訳 「たった一遍のお念仏で往生が叶うので、それ以後お念仏を称える必要はない。そればかりか、いたずらに罪を重ねれば、なお必ず往生が叶う」などと言っていることを信じてはいけません。このように信じることは、阿弥陀仏の本願をいっそう深く信じているかのように見えますが、実際は邪な考えとなるのではないでしょうか。）

このように法然上人は、一念義の輩による破戒を促すような主張が邪見に他ならないことを強く訴えられます。

こうした一連のご法語において法然上人は、一念義とその輩に対して「ものもおぼえぬ、あさましきひが事」「言語道断のこと」「附仏法の外道」「師子の身の中の虫」「天魔波旬のために、その正解をうばわれるともがら」「言うに足らざるの事」「邪見と成り候」等と、実に厳しい指摘を重ねておられます。あの寛容で温厚な法然上人が、他の著作・法語・消息等では決して見せることのなかった、こうした厳しい態度を示されたのも、念仏相続を軽んじ、造悪無碍を吹聴する一念義の邪義なることを明らかにする必要があったと共に、そうした輩の跋扈によって、法然上人が創唱した選択本願念仏思想に著しい誤解を生じ、教化伝道に努

めてきた専修念仏教団が大きな損害を蒙る事態を引き起こしていることをいたく憂えたからに他ならないでしょう。現にこれら一連のいわゆる「一念義停止起請文」は、専修念仏教団への弾圧の結果、法然上人が流罪となり、摂津勝尾寺に逗留されていた際に筆記されたものが多いと推定されています。こうした消息や法語をしたためざるを得なかった法然上人の思いはいかばかりであったことでしょう。

これら一念義を誡める一連のご法語からも知られるように、經典や論疏に基づかず、自身に都合の良いような解釈をいたずらに重ねてしまう表面的な学問がもたらす弊害について、法然上人は次のように訴えておられます。

【学生骨】 になりて、念仏やうしなわんずらん。『つねに仰せられける御詞』昭法全四九三頁

（現代語訳 学者ぶって念仏をあれこれ議論していれば、いつしかお念仏を称えなくなってしまうでしょう。）

このように法然上人は、頭でっかちになってしまった結果としてお念仏の相続を忘れてし

まうことの弊害をいたく危惧しておられるのであり、私達が厳に慎まなければいけないことです。

4、念仏相続のための学問

もちろん法然上人は、念仏相続のための学問の必要性を次のように述べられています。

自身の罪惡をうたがいて往生を不定に思わんは、おおきなるあやまりなり。さればとて、ふてかりてわろからんとはあらず。本願の手ひろく、不思議なる道理を心えんがためなり。されば念仏往生の義を、ふかくもかたくも申さん人は、つやつや本願の義をしらざる人と心うべし。源空が身も檢校別当どもが位にてぞ往生はせんずる、もとの法然房にては往生はえせじ。さればとしごろならいあつめたる智慧は往生のためには要にもたつべからず。されども ならいたりしかいには、かくのごとくしりたればはかりなき

事なり。〔『禪勝房伝説の詞』昭法全四六二頁〕

（現代語訳 自分の犯してきた罪惡を懸念して、往生は叶わないだろうと思うのは大きな間違いです。だからといって、投げやりに悪く振る舞ってよいというわけではありません

せん。自らを見据えることで阿弥陀仏の本願という救いの手は誠に広く、そして、こんな私でさえも救つて下さる不思議な道理であることに目覚めるからなのです。ですから、念仏往生の教えを奥深くて難解なものと言く人は、まったく本願の真意を知らない人とお心得なさい。そうした人達に言わせれば、この源空の身は、検校や別当という高位についてこそ往生は叶うのであって、ただの法然房という一介の僧では往生できないということになります。本願の働きによって救われるのですから、長年学び積んできた智慧とて往生のためには何の役にも立ちません。しかし、学んできた結果、このように気付いたならば、この上なく素晴らしいことです。）

ここで法然上人は、阿弥陀仏の本願の不思議な働きによってこそ往生は叶うのであって、自身が積んできた智慧など往生のためには何の役にも立たないと指摘される一方、そうしたことに気付くための学びの大切さを述べられているのです。

勢観上人問うて云わく、智慧もし往生の要となるべくんば、正直に仰せを蒙りて修学を営むべし。また唯称名不足無ければ、その旨を存すべくなり。

祖師答えて云わく、往生の業はこれ称名ということ、釈文分明なり。有智無智を嫌わずということ、またもって顯然なり。しかれば往生のためには称名足んぬとなす。学問を好まんよりは、唯一向に念仏して往生を遂ぐべし。弥陀・観音・勢至に遇い奉らん時、何れの法門に達せざらん。彼の国の莊嚴、昼夜朝暮に甚深の法門を説くなり。

念仏往

生の旨を知らざらん程はこれを学すべし。もしこれを知り已りなば、幾ばくならざる智慧を求めて称名の暇を妨ぐべからず。（『勢観上人との問答』昭法全六九五頁。『信空上人伝説の詞 其一』昭法全六六九頁、『一期物語』昭法全四四三頁にも同趣旨のご法語が伝えられる。）

（現代語訳 勢観房源智上人が法然上人に次のように尋ねました。もし、智慧を具えることが往生の肝要となるのであれば、素直にその仰せを蒙り、仏法を学んで修めるべきではありません。しかし、称名念仏だけで不足がないというのならば、そのように心得なければなりません。）

すると法然上人は次のようにお答えになりました。往生のための正しき行業、それが称名念仏であることは、善導大師のご解釈によって明らかです。また、往生は智慧のあるなしを選び好まないことも明らかにされています。だからこそ、往生のためには称名念

仏で事足りるのです。好んで仏法を学ぼうなどと思うよりも、ひたすらお念仏して往生を遂げるべきです。ひとたび極楽浄土において阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩にお会いしたならば、いったいいかなるみ教えを究められないのでしょうか。かの浄土の貴い莊嚴は、昼夜朝暮に奥深い教えを説いているからです。ただし、念仏往生の道理がしっかりと理解できていないうちはこれを学ぶべきです。この道理が理解できたならば、いかほどの成果も見込めない仏法の智慧を求めようとして、かえって称名念仏の暇を妨げることがあつてはなりません。）

ここで法然上人は、智慧の成就是極樂において達成すべきことを説きつつも、念仏往生の道理を理解するための修学の必要性を説かれています。

往生のためには念仏第一なり。学問すべからず、ただし 念仏往生を信ぜん程はこれを学すべし。（『渋谷入道道遍伝説の詞』昭法全四六八頁）

（現代語訳 往生を叶えるためにはお念仏が第一です。学問は必要ありません。ただし、お念仏を称えて往生が叶うと信じられるようになる程には、学問を修めるべきです。）

ここでも法然上人は、念仏往生の信を確立するための修学の必要性を説かれています。

このように法然上人は、学問とはどこまでも「念仏相続のための学問」であって、結果として念仏相続が妨げられるような「学問のための念仏」「学問のための学問」に終わってしまつてはいけなと強く戒めておられるのです。

第三段 「うたがいなく往生するぞ」——三心具足の称名念仏——

【原文】ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず。

〔現代語訳〕阿弥陀仏の極楽浄土へ往生を遂げるためには、ただひたすらに「南無阿弥陀仏」とお称えするのです。一点の疑いもなく「必ず極楽浄土に往生するのだ」と思い定めてお称えするほかには、何も細かなことはありません。

1、「うたがいなく申す」と三心具足の称名念仏

本段において法然上人は、「ただ南無阿弥陀仏と申す」「うたがいなく南無阿弥陀仏と申

す」ことだけが浄土往生のために必要であると述べられています。

阿弥陀ほとけの本願は、末代のわれらがためにおこし給える願なれば、利益いまの時に決定往生すべきなり。（中略）往生うたがいなしとふかくおもいいれて、南無阿弥陀仏、

南無阿弥陀仏と申せ」ば、善人も悪人も、男子も女人も、十人は十人ながら、百人は百人ながら、みな往生をとぐるなり。（『念仏往生要義抄』昭法全六八二頁）

（現代語訳 阿弥陀仏の念仏往生願は、末法の世に生きる私達のためにお誓いになった願なので、その利益は現在に及んでおり、間違いなく往生は叶うのです。（中略）ですから、「自身の往生に疑いはない」と深く受けとめて「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」と称えれば、善人であれ悪人であれ、男であれ女であれ、十人いれば十人が、百人いれば百人が、みな等しく往生を遂げるのです。）

ここで法然上人は、阿弥陀仏の本願に基づいているので、「往生うたがいなし」と受けとめて「南無阿弥陀仏と申せ」ば、必ず浄土往生が叶うと明示します。

念仏往生と申す事は、弥陀の本願に、わが名号をとえんもの、わがくに生まれずといわば、正覚をとらじとちかいて、すでに正覚をなり給えるがゆえに、この名号をとえうるものは、かならず往生する事をう。このちかいをふかく信じて、乃至一念もうたがわざるものは、十人は十人ながら生まれ、百人は百人ながらうまる。念仏を修すといえども、うたごう心あるものはうまれざるなり。（『念仏往生義』昭法全六八八頁）

（現代語訳 念仏往生とは、阿弥陀仏が「わが名号を称える者が、わが浄土に往生しないことがあれば、私は仏とならない」と本願に誓われて現に仏となれたのだから、阿弥陀仏の名号を称える者は必ず往生が叶うということです。このお誓いをしっかりと信じ、たとえ一遍のお念仏であっても往生が叶うことに疑いを挟まない者は、十人いれば十人皆が往生し、百人いれば百人皆が往生するのです。たとえお念仏を称えたとしても、そのお誓いに疑いを抱く者は往生しないのです。）

ここでも法然上人は、阿弥陀仏の本願に基づいているので、「うたがわ」ずにお念仏を称える者は必ず浄土往生が叶う一方、「うたがう心あるもの」は往生が叶わないとお示しです。

無智の者も三心は具すと云う事。一向の心にて念仏申して、疑い無く往生せんと思

えば、即ち三心は具足するなり。（『三心料簡および御法語』昭法全四四九頁）

（現代語訳 智慧のない者にも三心は具わるということについて。ただひたむきな心でお念仏を称え、何も疑うことなく往生したいと願うのであれば、それだけで三心は具わるものです。）

ここで法然上人は、「疑い無く往生せんと思」い「念仏申」すことによつて三心が具わるとお示しです。

こうしたご法語を通じて法然上人は、本段の「うたがいなく往生するぞと思ひ取りて申す」念仏によつて往生が叶い、そのお念仏がそのまま「三心具足の称名念仏」と同義となることを明らかにしておられるのです。

2、三心具足の称名念仏

法然上人にとって、浄土往生のための唯一の条件が「三心具足の称名念仏」であることは言うまでもありません。それは法然上人が、『無量寿経』第十八・念仏往生願文において誓

われた「至心に信樂して我が国に生ぜんと欲して」（聖典一卷二二七頁）の一節を、『觀無量壽經』上品上生において釈尊がお説きになり、善導大師の『觀經疏』や『往生礼讃』において詳述される至誠心（眞實の心）・深心（深く信じる心）・回向發願心（修めた善根を回向して淨土往生を願う心）の三心に相当すると理解されたからに他なりません。だからこそ法然上人は、『選択集』第八章段の篇目において「念仏の行者必ず三心を具足すべきの文」（聖典三卷一三九頁）と三心具足が念仏行者に必須であると述べられたのでしょう。

その『選択集』において法然上人は、善導大師の『觀經疏』と『往生礼讃』の三心についての記述を全文引用している一方、私釈がわずかであることから、『選択集』撰述時の法然上人にとって三心は、善導大師の説示通りに受けとめればそれで事足りるものであったと推測されます。ところが、先述したような念仏相續を軽んじ、貶めるような輩が、三心を種々に曲解してしまい、至誠心（三心）を私達凡夫が具える心ではなく、仏から私達に賜る心である等と捉える異義も現れるようになってしまいました。そうした点について法然上人は、次のように述べられています。

三心の中に、至誠心をやうやうにこころえて、ことにまことをいたすことを、かたく申

しなす』ともがらも侍るにや。しからば弥陀の本願の本意にもたがいて、信心はかけぬるにてあるべきなり。いかに信力をいたすというとも、かかる造悪の凡夫の身の信力にて、ねがいを成就せんほどの信力は、いかでか侍るべき。ただ一向に往生を決定せんずればこそ、本願の不思議にては侍りけれ。さように信力もふかく、よからん人のためには、かかるあながちに不思議の本願おこしたもうべきにあらず。この道理をば存じながら、まことしく専修念仏の一行にいる人いみじくありがたきなり。『念仏大意』昭法全四〇九頁)

(現代語訳 三心のうち、至誠心をさまざまに理解して、「私達は凡夫であるから真実の心を発することなどなおさらできようはずもない」と申す輩などおりましょうか。もしそうであるならば、そうした人は阿弥陀仏の本願の御意を履き違え、信心が欠けてしまっているに違いありません。たとえ私達がどれほど信心の力を注ごうとしても、私達のような悪業を造ってきた凡夫の信心に、往生という願いを叶わせるほどの力が、どうしてあるものでしょうか。ただひたすら往生の願いを揺るぎなくするからこそ、阿弥陀仏の本願は私達の理解を越えてもたらされるのです。自ら往生を遂げるほど信心の力が深く、徳も高いであろう人のために、阿弥陀仏がわざわざ私達の理解を越えた本願をお誓いに

なるはずはございません。こうした道理をよくよく心得て、ただひたすらお念仏一行を修める教えに心から帰入する人はいへん尊い方です。」

このご法語から、すでに法然上人在世当時には、三心、特に至誠心の受けとめ方に異義が生じていたことが分かります。法然上人は、そうした門下における三心の誤った受けとめ方を正すためにも、種々のご法語や消息・問答などにおいて、他のいかなる教学用語よりも多くの紙幅をさいて、実に懇切丁寧に三心について言及されていきます。

3、三心具足の多様な姿①―願往生心・決定往生心・助け給え―

法然上人は、以下の一連のご法語において、『観経疏』や『往生礼讃』の三心釈に説示される詳細な三心の理解をかみ砕いて平易にし、あるいは、その説示を一旦離れるなどして、実に多様な三心具足の姿を説き示されます。

三心を具して、かならず往生す。一つの心もかけぬれば、生まるる事を得ずと、善導は釈し給いたれば、往生を願わん人は最もこの三心を具すべきなり。しかるにかように申

したるには、別々にて事々しきようなれども、心得解くにはさすがに「**やすく具しぬべき心**」にて候なり。詮じてはただまことの心ありて、深く仏のちかいをたのみて、往生を願わんずるにて候ぞかし。（『御消息』昭法全五八四頁。『浄土宗略抄』昭法全六〇〇頁、『大胡の太郎実秀へつかはす御返事』昭法全五一九頁にも同趣旨のご法語が伝えられる。）

（現代語訳 「三心を具えたならば必ず往生する、そのうち一つでも欠けることがあれば往生は叶わない」と善導大師が解釈しておられるからには、往生を願う人は必ずこの三心を具えるべきです。このように言いますと、三心はなにやらまちまちで仰々しいものに思われるでしょうが、心得てみれば実は具えやすい心なのです。要は、ただまことの思いで、阿弥陀仏の本願におすがりして、往生を願う心なのです。」）

このように法然上人は、三心を平易かつ簡潔にまとめ、実は具足しやすい心であるとお示しです。

三心と申し候も、ふさねて申すときは、ただ「**一つの願心**」にて候なり。その「**願う心**」の、

いつわらずかざらぬかたをば至誠心と申し候。このころまことに念仏すれば、臨終に來迎すということ、一念も疑わぬかたを深心とは申し候。このうえわが身もかの土へ生まれんと思ひ、行業をも往生のためとむくるを回向心とは申し候なり。〔法性寺左京大夫の伯母なりける女房に遣はす御返事〕昭法全五八九頁

（現代語訳 三心と言ひましても、ひとことと言ふならば、ただ往生を願ふ心です。その願ふ心の、正直で飾ることがないさまを至誠心と呼びます。そのようなまことの心でお念仏を称えたならば、臨終には必ず阿弥陀仏のお迎えがあると信じて決して疑われないさまを深心と呼びます。その上で自分自身が極樂浄土へ往生したいと思ひ、すべての善根を往生のために振り向けるさまを回向心と呼ぶのです。）

ここで法然上人は、三心に共通する基盤を願往生心に集約し、その上に至誠心・深心・回向心を配当していることが分かります。

三心を安く具る様あるなり。決定往生せんずるなりと思取て申す念仏は、誠の心を至さんと教る至誠心も此心に納りぬ。又この阿弥陀仏の本願に疑いを成さず。決定往生

すべきぞと思えと教るに、深心も此内に納りぬ。第三の回向発願心も申したらん念仏を一脈に決定往生せんずるぞと願えと教るに、回向発願心も此内に納るなり。明らかに知んぬ、決定往生せんと思ひ切りて申す念仏に三心は皆納るなりと云う事を。されば習わざる物なれども決定往生せんずるぞと思ひ切て申し居る程に三心をもつことは安きなり。（『常に仰せられける御詞』昭法全四九一頁）

（現代語訳 三心をたやすく具える様とは次のようなものです。「必ず往生するのだ」と思ひ定めてお念仏を称えるなかに「誠の心をもつて」という至誠心がすでに込められているのです。また「阿弥陀仏の本願に疑いを差し挟まず、必ず往生するのだと思ひなさい」と教える深心も、やはり、お念仏を称えるなかに込められているのです。また同様に「お念仏を称えるにあたっては、必ず往生するのだと絶え間なく願ひなさい」と教える第三の回向発願心も、お念仏を称えるなかに込められているのです。これらのことから明らかにお分かりでしょう。「必ず往生するのだ」と心を決めて称えるお念仏に、三心はみな納まっているということ。ですから、三心とはどのようなものか教わらなかった人でも、「必ず往生するのだ」と心を決めて称え続けるならば、三心をもつことはたやすいことなのです。）

ここで法然上人は、「必ず往生するのだ」という決定往生心をもってお念仏を称えれば、自ずと三心を具えることができますとお示しになります。

詮ずる所、この念仏は「決定往生の行なりと信を取りぬれば、自然に三心は具足して、往生するぞと、易々と仰せられ侍りしなり。」（『念仏往生修行門』聖典六卷二七一頁）
（現代語訳 法然上人は「要するに、このお念仏は必ず浄土往生が叶う行であるという信心に至ったならば、自ずと三心は具わり往生が叶うのです」といともたやすく仰いました。）

ここで法然上人は、決定往生の行であるという信を具えてお念仏を称えれば、自ずと三心を具えることができますとお示しです。

南無阿弥陀仏というは、別したる事には思ふべからず。阿弥陀ほとけ我を「たすけ給え」ということばと心えて、心にはあみだほとけ、「たすけ給え」とおもいて、口には南無

阿弥陀仏と唱るを三心具足の名号と申すなり。（『つねに仰せられける御詞』 昭法全四九二頁）

（現代語訳 南無阿弥陀仏については、別段難しく考える必要はありません。「阿弥陀仏、どうかこの私をお救い下さい」という言葉と心得て、心には「阿弥陀仏、お救い下さい」と思い、口には「南無阿弥陀仏」と称えることを「三心が具わった名号」というのです。）

ここで法然上人は、「たすけ給え」という思いで念仏相続するさまを三心具足の称名念仏と示します。

このように法然上人は、ある時は願往生心、ある時は決定往生心、ある時は「たすけ給え」の心等と実に柔軟に三心に対応させていることが分かります。

4、三心具足の多様な姿②——一向・一心不乱・信心歡喜・歡喜踊躍——

法然上人による多様な「三心具足の称名念仏」の理解は続きます。

その名をだにもしらぬものも、このところをばそなえつべく、またよくよくしりたらん人の中にも、そのままに具せぬも候ぬべきころにて候なり。（『大胡の太郎実秀へつかはす御返事』昭法全五二〇頁）

（現代語訳）三心は、その名称すら知らない人にも具わるものです。けれども、実に細かにその内容を理解している人の中にも、その通りには具わっていない人もいるものです。）

ここで法然上人は、三心の内容をよく学んだ人が必ずしも三心を具えているわけではなく、その名称すら知らない人でも三心を具えているものだとお示しになります。

故法然聖人のおおせごとありしは、三心をしれりとも念仏せずばその詮なし。たとい三心をしらずとも念仏だにもうさばそらに三心は具足して極樂には生ずべしとおおせられし。（『隆寛律師聴聞の御詞』昭法全七三七頁）

（現代語訳）たとえ三心をよく理解していてもお念仏を称えなければ何にもなりません。たとえ三心を知らなくともお念仏さえ称えていれば、自ずと三心は具わり極樂に往生す

るのです。)

ここでも法然上人は、三心を理解していてもお念仏を称えなければ意味はなく、三心を知らない人であつても念仏相續すれば自ずと三心が具えられるとお示しです。

三心といえる名は各別なるにたれども、詮ずるところは、ただ「**一向専念**」といえる事あり、一すじに弥陀をたのみ念仏を修して、余の事をまじえざるなり。(『念仏往生義』昭法全六九一頁)

(現代語訳 三心という名称からするとそれぞれ別の心持ちのようですが、経文に「**一向専念**」とあるように、要はひとすじに阿弥陀仏をたよりとしてお念仏を称え、他の行をまじえない、そうした心持ちをいうのです。)

このように法然上人は、三心とは個別の心ではなく、『無量寿経』三輩段に「**一向**」に専ら無量寿仏を念じ(上輩)」「(聖典一卷二四九頁)、「**一向**」に専ら無量寿仏を念ずべし(中輩)」「(聖典一卷二五〇頁)、「**一向**」に意を専らにして、乃至十念、無量寿仏を念じて(下

輩」(聖典一卷二五〇頁)、あるいは、『觀經疏』散善義に「**一向**に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り」(淨全二卷七一頁下段)等と説かれるように、「**一向**」にお念仏を相續していく中に三心が具足されていくと明示です。

觀經の**三心**、小經の**一心不乱**、大經の願成就の文の**信心歡喜**と、同流通の**歡喜踊躍**と、みなこれ**至心信樂の心**なり。(『十七條御法語』昭法全四六九頁)

(現代語訳 『觀無量壽經』に説かれる「三心」と、『阿彌陀經』に説かれる「一心に乱れることなく」、『無量壽經』の阿彌陀仏の本願成就の文にある「心から信じて喜びにひたる」、同じく流通分の「喜びに湧き身を踊らせる」などの一節は、すべて第十八念仏往生願で「嘘偽りなく心の底から…」と説いているのと同じ心なのです。)

このように法然上人は、『阿彌陀經』の「**一心不乱**」(聖典一卷三一八頁)、『無量壽經』の「**信心歡喜**」(聖典一卷二四九頁)や「**歡喜踊躍**」(聖典一卷二八四頁)など、やはりお念仏と共に説かれるさまざまな心のありさまも三心に他ならないと明示です。

ここまで取り上げたご法語からも明らかなように、法然上人が、「三心具足の称名念仏」

とは言いながらも、三心の名称すら知らなかったとしても三心は具えられ、あるいは、お念仏を「一向」に相続していく中に三心は具えられ、あるいは、「一心不乱」や「信心歓喜」「歓喜踊躍」の中に三心を見出される等、実に多様かつ柔軟に三心を受容していることが分かります。

5、三心具足の多様な説示の根拠―弥陀化身善導の説示に基づいて―

法然上人が、ここまで多様かつ柔軟に三心を受容し、豊かに三心を表現することができた背景、そして、念仏相続によって三心を具足することができると結論づけられた根拠は、いったいどこに求められるのでしょうか。もちろんまずは、法然上人ご自身の高度な宗教体験に求められることでしょう。さらに、その上で弥陀化身として偏依された善導大師のお言葉に基づいていることを次のご法語に見出すことができます。

ある人問うていわく、善導本願の文を釈し給うに、至心に信樂して我が国に生ぜんと欲して、の安心を略し給う事、なに心かあるや。

答えての給わく、衆生称念すれば必ず往生を得、と知りぬれば、自然に三心を具足す

るゆえに、このことをあらわさんがために略し給えるなり。（『信空上人伝説の詞
其一』昭法全六七一頁。『一期物語』昭法全四四二頁、『源智伝聞の御詞』昭法全七五五
頁にも同趣旨のご法語が伝えられる。）

（現代語訳 ある人が法然上人に「善導大師が阿弥陀仏の念仏往生願を解釈するにあた
り、その文にある〈嘘偽りなく心の奥底からわが浄土に往生したいと願う心〉、すなわ
ち安心を省略されたのはどういう理由からなのでしょう」と質問しました。

法然上人は「善導大師の〈衆生が阿弥陀仏の名号を称えれば必ず往生が叶う〉とのお言
葉を心得れば、三心は自ずと具わるものだからです。こうした道理を明らかにするため
に善導大師は、安心を省略して解釈されているのです」とお答えになりました。）

そもそも『無量寿経』における阿弥陀仏の第十八・念仏往生願とは次の一節です。

設し我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、我が国に生ぜんと欲して、
乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺をとらじ。（聖典一卷二二七頁）

そして、この『信空上人伝説の詞 其一』に説かれるように、善導大師は『往生礼讃』において、第十八願を次のように解釈されたのです。

もし我れ成仏せんに、十方の衆生、

我が名

号を称すること、下十声に至るまで、もし生ぜずんば正覚を取らじ。彼の仏、今現に世に在して成仏したまえり。まさに知るべし。本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生することを得。〔浄全四卷三七六頁上段〕

この一節の中に第十八願文の中にある「至心に信樂して我が国に生ぜんと欲して」という三心に該当する心の様相やその意味内容の説示を見出すことはできません。法然上人は、偏依善導一師を撰述の基底に据えた『選択集』第三章段においてこの一節を引用されていますが（聖典三卷一一三頁）、その時点においては、このご法語において明言されるような受けとめ方はされていないようです。しかし、三心の誤った受けとめ方が惹起してくる中で法然上人は、弥陀化身たる善導大師が、三心をすべて省略され、「衆生称念すれば必ず往生することを得」と述べられていることを根拠として、阿弥陀仏自身の直説・聖意として善導大師

が念仏相続による三心具足と決定往生を説いて下さったと受けとめられたのです。

その後、法然上人は、さまざまなご法語において、あるいは三心を略され、あるいは三心を多様かつ柔軟に説示され、あるいは念仏相続によって三心が具足されるというご法語を展開されるようになったのでしょう。ここに法然上人が、善導大師を弥陀化身とまで尊崇された姿勢を改めて見出すことができると共に、法然上人の慧眼にあらためて感服させられるのです。⁽¹⁷⁾

同様の視点から、次のようなことも言えるでしょう。すなわち法然上人は、同じく『選択集』第三章段において第十八願の善導大師による解釈として『往生礼讃』の一節と共に次の『観念法門』の一節を引用されています（聖典三卷一一三頁）。

もし我れ成仏せんに、十方の衆生、我が国に生ぜんと願じて、我が名字を称すること、下十声に至るまで、我が願力に乗じて、もし生ぜずんば正覚を取らじ。（浄金四卷二三三頁上段）

この一節には、「至心に信樂して」という至誠心・深心に該当する一節を見出すことはで

きず、「我が国に生ぜんと願じて」という願往生心のみが説かれています。この一節を通じて法然上人は、凡夫の性を知り尽くされた専修念仏の導師たる善導大師が、弥陀化身という視点から、三心を願往生心に集約して説き示されていると受けとめられたことでしょう。そして、それを契機として法然上人は、種々のご法語において、三心を願往生心や決定往生心、あるいは、「たすけ給え」の心等へと転換・昇華されたのでしょうか。やはりここにも法然上人の慧眼がいかなく発揮されていることが知られるのです。

このように法然上人は、『選択集』第八章段において引用された『観経疏』や『往生礼讃』における善導大師による三心釈を踏まえつつ、やはり『選択集』第三章段において引用された『往生礼讃』や『観念法門』における善導大師による第十八願を解釈された説示を拠り所として、弥陀化身である善導大師が、あるいは三心を省略され、あるいは念仏相続による三心の具足を説かれ、あるいは三心を願往生心に収斂されていると受けとめられたのです。その結果、法然上人は、三心を①願往生心、②決定往生心、③「たすけ給え」の心、④『無量寿経』『観無量寿経疏』所説の「一向」、⑤『阿弥陀経』所説の「一心不乱」、⑥『無量寿経』所説の「信心歡喜」「歡喜踊躍」等と実に多様に解釈されるようになったのです。さらに法然上人は、三心の理解やその具足についても、⑦三心を学び知ることを浄土往生の必

要条件とはしない、⑧念仏相続による三心の具足等、実に柔軟に説示されるようになったと推測されるのです。

そして、そうした法然上人の尊い智見が「うたがいなく往生するぞと思い取りて申す」という本段の説示に結実されることになったのは明らかであり、それは紛れもなく、『選択集』撰述以降、法然上人在世中に惹起した念仏相続を軽視する邪義に対する回答に他ならないものであることが容易に想像されるのです。

このように私達浄土宗僧侶は、前述した五重相伝会の要偈道場において聖聡上人説『安心請決略抄』を左脇師が拝読する意義を重く受けとめて、正しい〈浄土宗のお念仏〉の学びを大切にする姿勢を決して見失ってはいけないのです。

※第四段以降は、『令和八年度 布教羅針盤』以降に順次掲載予定です。

【註】

(1) 『浄土宗新聞』平成二十六年九月号六面

(2) 伊藤祐晃氏「一枚起請文並に二枚起請文に就て」(同氏『浄土宗史の研究』(同氏

遺稿刊行会、一九三七年）所収。後『浄土宗学研究叢書（宗史・宗論篇）』浄土宗史の研究』（国書刊行会、一九八四年）として再刊）

- （3）野田秀雄氏編『一枚起請文あらかると』（四恩社、二〇〇〇年。後、増補改訂版（二〇一〇年）刊行）

- （4）『一枚起請文』には、一般檀信徒の方に向けた懇切丁寧な解説書をはじめ、特に書誌的視点から詳細に考察を加えられた多くの学術書や研究論文があるが、その主なものについて紹介する。

〔主な解説書〕

- ・香月乗光氏『一枚起請文のこころ』（知恩院御忌局、一九五九年）
- ・藤井実応氏『法然と一枚起請文 法然のご遺訓』（大東出版社、一九八六年）
- ・藤堂恭俊氏『一枚起請文のこころ』（東方出版、一九八七年）
- ・野田秀雄氏編『一枚起請文あらかると』（四恩社、二〇〇〇年。後、増補改訂版（二〇一〇年）刊行）

〔主な学術書・研究論文〕

- ・伊藤祐晃氏「一枚起請文並に二枚起請文に就て」（同氏『浄土宗史の研究』（同

氏遺稿刊行会、一九三七年」所収。後『浄土宗学研究叢書〈宗史・宗論篇〉浄土宗史の研究』〔国書刊行会、一九八四年〕として再刊)

・玉山成元氏「一枚起請文について」〔『浄土学』二六、一九五八年。後『日本名僧論集 第六卷 法然』〔吉川弘文館、一九八二年〕に再録〕

・小川竜彦氏『一枚起請文原本の研究』(同刊行会、一九七〇年)

・中野正明氏「善導寺御消息」諸本の問題点」(同氏『法然遺文の基礎的研究』第Ⅱ部 第六章、法蔵館、一九九四年)

・安達俊英氏「御法語の背景^⑬」『一枚起請文』(一)～(四)〔『宗報』二〇〇二年一月号、三月号～五月号〕

・角野玄樹氏「一枚起請文」〔『浄土教典籍目録』佛教大学総合研究所、二〇一一年三月〕

(5) 拙稿「『選択集』における善導弥陀化身説の意義―選択と偏依―」〔『仏教文化研究』四二・四三合併〕、同「法然上人「三部経釈」に説かれる「選択」をめぐって」〔『三康文化研究所年報』三二〕、同「廬山寺蔵『選択集』における偏依善導一師をめぐる推敲」〔『仏教文化学会紀要』一〇〕、同「法然上人思想史の回顧と展

望」(『浄土宗開宗の総合的研究』浄土宗教学院、二〇二四年)等を参照されたい。

(6) 前掲註(4) 玉山成元氏論文、一二三頁。

(7) 前掲註(4) 中野正明氏論文、四九一―二頁。

(8) 前掲註(4) 安達俊英氏「御法語の背景」⑬『一枚起請文』(一)」「(『宗報』二〇〇二年一月号、四七頁)。

(9) 法然上人が源智に授けた真蹟とされる大本山黒谷金戒光明寺蔵の『一枚起請文』については、その真蹟説への疑念がしばしば提示され、ついに玉山成元氏によって「私はついに黒谷金戒光明寺本が偽物であるという結論に到達した」(前掲註(4) 玉山成元氏論文、一二三頁)と指摘されるに至っている。それ以降、小川竜彦氏による玉山説への反駁(前掲註(4) 小川氏著書)などがあるものの、黒谷金戒光明寺本の真蹟説への疑義が払拭された状況にあるとは言い難い状況が継続している。しかし、その玉山氏自身が、次のような指摘を続けておられることにも注目しなければならない。

けれどもこのような結論に達したからといっても、その内容が偽物であるというのではない。それは正しく法然上人の常時いだかれていた信念であった

に相違ないことは信じて疑わないのである。だからこの研究は決して浄土宗の教義を否定するものではなくない。それどころかこの一枚起請文の文句は上人が常時これを人々に教示していたものであり、それは口癖にさえなっていたものと思われる。それ故にこそ法然上人在世当時には文書にならなかったものと思っている。これが文書となったということはそれを結局は時間がさせたことであって、弟子達はこれを確実にしたいと要求する。それが弁阿から入阿への伝授の際に文書となり、また源智によって作製されたものが上人の自筆となったものと思う。そして更に黒谷金戒光明寺本の成立は、この法然上人の口癖を手印まで捺した起請文にまでしてしまったものである。そこには旺盛な信仰の現われを見るのであり、われわれはその宗教的活動に対して尊敬をこそ払え、これを決して非難するものではない。けれども事実はまた事実として尊ばなければならない。それが健全な信仰を保持して育成して行くものであると信ずるからである。(前掲註(4) 玉山成元氏論文、一二三頁)

このように玉山氏は、黒谷金戒光明寺本、特にその「為証」以下の添え書きの

部分について強い疑義を提示され、その結果、その真蹟であるという点を否定されているのであつて、『一枚起請文』本文の説示内容にまで疑義を呈されているわけではないのである。そればかりか、『一枚起請文』本文の説示内容については、法然上人が「常時いだかれていた信念」「常時これを人々に教示していたもの」であり、「口癖にさえなっていたもの」と指摘され、さらに言えば、黒谷金戒光明寺本にさえ、「そこには旺盛な信仰の現われを見るのであり、われわれはその宗教的活動に対して尊敬をこそ払え、これを決して非難するものではない」と説示され、深い敬意をはらつておられることなど、その姿勢はまことに敬服すべきものと言わねばならない。

『一枚起請文』に限らず、法然上人自身の真筆がほとんど伝えられていない現状において、すでに多くの先学によつて、法然上人遺文への精査が積み重ねられ、その作業は、今なお継続している。筆者自身、法然上人遺文の書誌について、これまで種々に検討を加えてきた者ではあるが、その一方で、可能な限りの書誌的検討を施した上で、その時点における法然上人の思想究明を不断に進める作業を怠つてはいけな思考えている。無論、その思いは『一枚起請文』に向けても同

様である。特に『一枚起請文』は、浄土宗に連なる者達にとって、もっとも親しまれ、もっとも多く拝読されている法然法語であり、その説示内容こそ法然上人の教えの究極であると広く受けとめられている以上、そうした作業を一步でも二歩でも進めることが肝要であろう。

(10) 拙稿「『選択集』の構造―偏依善導一師―」(『印度学仏教学研究』五五―一)を参照されたい。

(11) 平雅行氏は、その論考「建永の法難について」(同氏『日本中世の社会と仏教』所収)において、建永の法難における専修念仏教団弾圧の主要因をめぐる各種論考を、①門弟の行状による、②法然の思想そのものによるという二つの立場に分類し、平氏自身は後者の立場に立つことを鮮明にし、平氏のいう諸行往生を否定した選択本願念仏思想に求めている。さらに、その正統な系譜は、証空や親鸞等のいわゆる安心派に継承され、聖光・良忠等の諸行往生を認めた鎮西派をその外に位置づけている。平氏の所論は、大いに傾聴すべきものであるが、選択本願念仏思想やその系譜の捉え方については、見直すべき点が多くあると思われる、その詳細については、別稿を期したい。

(12) 源智系統の『一枚起請文』や『御誓言の書』に対し、聖光系統の『善導寺御消息』諸本にも「智者フルマイナカクセスシテ、タタ一向ニナモアミタ仏トマウシテソカナハム」(昭法全四三四頁)とあり、両者の趣旨は同一と見て良いだろう。なお、一向とは、文字通り、「一つに向かうこと」で、「ひたすら」「もっぱら」などと訳される。心を一つのことに向けた結果、「他の事へ向けないこと」となる。浄土宗で「一向」といえば、お念仏以外の諸行をあえて修めることをせず、お念仏一行をひたすら称えることである。『一枚起請文』本文の結文「ただ一向に念仏すべし」の解説において詳説する。

(13) 拙稿「仏教における念仏―念から声へ―」(『秋篠文化』五)等を参照されたい。

(14) 拙稿「法然上人『往生要集』四積書の研究―助念方法門、惣決要行釈をめぐって―」(『法然上人研究』五)、同「法然上人『往生要集』釈書撰述についての一考察」(『仏教文化学会紀要』四・五合併)等を参照されたい。

(15) 拙稿「法然上人「選択思想」と「勝劣難易二義」をめぐって」(『仏教論叢』四三)、同「法然上人における勝劣義の成立過程―『逆修説法』から廬山寺藏『選択集』へ―」(『仏教文化学会紀要』八)、同「法然上人における難易義成立の意義―機辺

から仏迦へ―」（『阿川文正先生古稀記念論文集・法然浄土教の思想と伝歴』所収）、同「法然上人における勝劣・大小・多少相對三義の成立について―「念仏多善根の文」渡來の意義―」（『宮林昭彦先生古稀記念論文集・仏教思想の受容と展開』所収）、同「法然上人による「人中分陀利華」釈說示の意義―勝劣難易二義との関連をめぐって―」（『佐藤良純先生古稀記念論文集・インド文化と仏教思想の基調と展開』所収）、同「法然上人『觀無量壽經』に説かれる「人中分陀利華」釈について―廬山寺藏『選択集』との対比を通じて―」（『佐藤成順博士古稀記念論文集・東洋の歴史と文化』所収）等を参照されたい。

（16）『新纂浄土宗大辞典』「十念異解」の項を参照されたい。

（17）かつて丸山博正氏は、念仏相續による三心具足について、「法然が念仏の相續により三心具足が可能であると言い切れた根拠は、三心が仏の本願によつて定められたものであり、したがつて念仏を相續していく行者の心に三心を具足させる本願力がはたらくからであるといえる」（『行具の三心について』（『小澤教授頌壽記念論文集 善導の思想とその影響』三三四頁）と指摘をされている。本稿に提示した『信空上人伝説の詞 其一』等のご法語こそ、丸山氏の推論を裏付けることと

なる文献、すなわち、弥陀化身善導の所説、言い換えれば阿弥陀仏ご自身の自説であると指摘できる。

◎第2章◎

布教实例

頼みとすべき道しるべ

鳥取教区 大善寺 米村 昭寛

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

謹み敬って拝読し奉る。元祖大師法然上人御遺訓「一枚起請文」にのたまわく。

「ただ往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず」と。(十念)

浄土宗が開宗されて八五〇年がたちました。当時の歴史書や公家の日記などを見ますと、大変不安定な時代だったことがわかります。浄土宗開宗の年は、京都では天然痘（疱瘡）が蔓延していました。二年後にも同様の記述がありますので、しばらく流行を繰り返していたようです。

私たちはこの数年間、コロナ禍を経験しました。この体験から学んだことは多いと思います。

コロナ禍になり間もない頃、感染者やその家族への差別、誹謗中傷が多数起こりました。その地域で最初に感染した人が、非難の声にさらされて精神を病み、引越を余儀なくされたということもありました。県外ナンバーの車が傷つけられたという報道もありました。生存本能からくる病への忌避意識がコロナ患者への差別を引き起こしたのでしょうか。この病気は人の愚かさをあぶりだしました。

そして、それは法然上人の時代と同じだったと思います。

ある方が法然上人に質問しました。

「はやり病で死んだら罪ですか」

約八百年前も同じような暴力があったといえるでしょう。病への恐れから罹患者は罪深い

と遠ざけられ、心無い言葉が本人や遺族を苦しめたことと想像できます。この質問に上人は静かにお答えになりました。

「それは違います。念仏すれば往生します」

大変短いお答えですが、質問者はこの上なく嬉しかったでしょう。なぜならお答えになったのが智慧第一と称えられる法然上人だったからです。

先ほど拝読いたしましたお言葉は、「一枚起請文」の一節です。「一枚起請文」は法然上人がご往生の二日前に書き遺されました。もし私たちが最期を迎えるとしたら、その時子孫に對してつまらないことを言おうとするでしょうか。遺していく者を思い発する言葉は真実であり嘘偽りはないでしょう。ましてや勢至菩薩の応現と称される法然上人の最後の教えです。上人はあらゆる人々のために、浄土宗の教えのすべてをこの一枚に示してくださいました。

中でも先ほど拝読したご文は「本願念仏しょうぎの正義を示す」とされ、「一枚起請文」の要のご文です。

「ただ往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取って申す外には別の仔細候わず」

「ただ往生極樂のためには」

阿弥陀さまのご本願のお念仏は何のために修するのか、それは「ただ往生極楽のため」に修するということです。他のことを目的とはしません。その為に、

「南無阿弥陀仏と申して」

これが往生極楽の為の行です。ただ南無阿弥陀仏と申す、往生極楽の為には他の行は差し挟まないということです。そして、

「うたがいなく往生するぞと思ひ取りて」

ここが私たちの心の置き所を示しています。「思ひ取りて」というのは思ひ定めるところで、「往生」が我が手に入つたように必ず叶うと信じることです。さらに、

「申す外には別の仔細候わず」とされ、他に奥深き事はない、と法然上人は仰せになりました。すなわち、阿弥陀さまのご本願のお念仏とは、往生極楽の為には心を極楽に思ひ定めて、ただ一向に念仏を続ける以外にないということです。この一文には、浄土宗の教えのすべてがこもっています。

一声も 捨てぬ誓いの うれしさに

思わず積もる 弥陀のかずかず

（最期の一声でもいいと、阿弥陀さまはわずか一遍の南無阿弥陀仏の中に一度の往生が叶

うというとてもない功德を込めてくださいました。それほど尊い六字の名号であるといただいたその日から命尽きるその時まで、捨てぬ誓いのうれしさに思わずとなえ続ける南無阿弥陀仏のかずかずです)

私が小学三年生の時、住職である父が亡くなりました。お寺というのは住職が亡くなれば、次の住職を迎えなくてはなりません。現代はその子どもが跡を継ぐことが多いのですが、それができなければどこから次の住職をお迎えし、家族は寺を去らねばなりません。当然、小学生の私ではどうすることもできませんでした。今後の寺院運営についての話し合いが総代さんたちを中心に行われました。その時に母が「私が僧侶になり、子どもたちが跡を継ぐまで寺を守ります」と宣言し、先代である私の祖父が住職に復職することとなりました。

母の修行中、お檀家の二人のご婦人が泊まり込みで体の不自由な老僧と子どもたちのお世話をしてくださいました。参観日や運動会にも母に代わって来てくださいました。どちらも若い時から老僧と各寺院の法要に参加し、法話を聞いてこられた大変熱心な方々でした。

二人とも亡くなりましたが、そのうちの一人の娘さんの話です。

その方は大変明るく「チエちゃん」と呼ばれ、皆から親しまれていました。ご主人とともに実家に暮らし、お母さま亡きあとはお寺の婦人会にも入ってくださいました。各法要、ご

詠歌、本山での研修、団体参拝等にも欠かさず参加され、のちに婦人会会長として十年以上住職を支えてくださいました。

令和四年、チエさんに病気が見つかりました。「すい臓がん」のステージ四でした。その報告は深刻な話のはずでしたが、口調はいつものように明るくハキハキとしたものでした。病状の報告後、ご自身の人生を振り返り、「私の人生は人に恵まれた人生でした。周りの人に助けられ、子や娘婿にも恵まれました」といって、一枚のメモを見せてくれました。それは数年前の総本山知恩院での研修会の時のメモで「人生で一番ラッキーだったのは主人と会ったこと。できれば主人を看取って恩返しをしたい。もし自分が早く逝ったらごめん」と書かれていました。「主人には申し訳なく思います」と、その時一瞬目を伏せられました。

そして、「母の教えは『南無阿弥陀仏』となえて、自分でやれることは自分でやる。自分ではどうすることもできないことは阿弥陀さまにお任せする』というものでした。その教えを聞き、また法話を聞くことで、自分もそれを心の支えとしてきました。だから今こうして明るく話せているのかもしれない。それを家族に伝えているから、南無阿弥陀仏で家族とつながっているのだと思います」と言われ、主治医にもこの話はしてあると教えてくださいました。

投薬による治療が始まりました。薬の副作用で体が弱り、間質性肺炎にもなりました。コロナ感染を避けるために外出できなくなり、お会いすることも難しくなっていました。苦しいことも多かったに違いありません。しかしながら、病院からの電話の声はいつものように明るいままでした。

その年の暮れ、ご挨拶に自宅に伺いました。娘さんが都会から看病に帰っておられました。ご本人は元気そうでしたが、月に何度か入院し投薬治療をしているということでした。そして、入院中の出来事について教えてくださいました。

ある時看護師さんに「母がとなえていたお念仏の教えが私の支えとなっています。お寺で聞いてきた教えは、往生するというのは、極楽に生まれるということ。極楽に生まれて修行して、立派な仏さまに成らせていただくという未来が私にはある。だから今は自分ではどうすることもできないことは阿弥陀さまにお任せし、できることは自分です。この教えが私の中に生きているから、今も私の心の芯がしっかりしていると思うんです」と話されたといひます。その看護師さんは、「実は今私もガンと闘っています。とても勇気づけられました」とお礼を述べられたということでした。また同室の同じ病気の患者さんにもこの話をしたら、同じように「力づけられました」と感謝されたと教えてくださいました。……病院で

浄土宗の布教をされていたようです。

亡くなられたのはそれから数か月後でした。訃報を受け伺うと、お顔の表情はまるで微笑んでいるようで、伝記に記される法然上人の最期の様子が頭に浮かんできました。

「建暦二年正月二十五日正午、『光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨』のお経の文を唱えられ、法然上人は眠るように息を引き取られました。『面色めんじきことに鮮やかに 形容ぎようようえ笑めるに似たり』（お顔の色は美しく、その表情は笑っておられるようでした）」

最後まで南無阿弥陀仏を支えとし、法然上人のように微笑んで往生された姿を尊び、お念仏をおとなえしました。

「ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取って申す外には別の仔細候わず」

今も私たちのことを極楽から多くの方々が見守ってくださいていることでしょう。ならばその思いに応え、往生極楽という未来を願い、これからも共に南無阿弥陀仏となえ続けていただきたく存じます。

同称十念

往生疑いなし

兵庫教区 法輪寺 北村 隆彦

【設定】 自坊法話会にて檀信徒に対しての法話

「ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取りて申す外には別の仔細候わず」

皆さんようこそ法話会にお越しくださいました。

今年もいよいよ終わりが近づいてきました。皆さん、今年はどんな年でしたか？目標通りに進むことができましたか？ 目標に向かって一歩ずつ進んでいる実感があれば、どんなに辛くても頑張れるものです。しかし、人生は順風満帆なことばかりではありません。時には絶望の淵に立たされることもあります。

夢を諦めることや、叶わない夢、体調の不調、家庭の問題、仕事や事業の失敗、失恋、大切な人との別れなど、さまざまな困難に直面することがあるでしょう。

順調な時には、仏教の教えが必要ないと感じるかもしれません。しかし、世の中の価値観では生きられなくなった時こそ、仏教の教えが心に染み入るのです。

浄土宗の教えは、極楽浄土を目指す教えです。そこでお尋ねしますが、皆さんは極楽浄土へ行きたいですか？ 改めて聞かれると、戸惑われるかもしれませんね。「お念仏はとなえてはいるけれど、とりたてて極楽へ行きたいとはつきりと思つたことはないなあ」という方もおられることでしょう。

では皆さんは何を目指しておられますか？ 若い方は夢の実現や自己成長を目指すのかもしれませんが。家庭を持つ方は「家族がずっと元気でありますように」と願う方も多いことでしょう。

しかし、夢が実現しても成長しても、それが達成された後には達成した喜びは消えてしまいます。新たな目標を掲げても、掴んでは消えていつてしまいます。

また、残念ながら、家族の健康が永遠に続くこともありません。仏教では、私たちが求めているものは泡のように消えるものであり、追い続ける限り満足は得られないと教えられます。

健康を求めても、いずれ病にかかります。若さを求めても、永遠に若くいることはできま

せん。「生きていだけでいい」と言っても、誰も永遠に生き続けることはできません。自分と愛する人だけが生き続けることも不可能です。

「若いうちが花」「元氣なうちが花」「元氣なうちに美味しい物を食べて、行きたいところへ行くことが幸せ」「死んだらしまい」と考える人は、右肩下がりの人生を恐れて生きていると言えるでしょう。ですが、そうした価値観では元氣のピークを過ぎると生きる意味を見失いがちです。そのため、年を重ねるにつれ、「長生きなんてしたくなかった」と、生きる価値がないように感じてしまう人が多いのです。

法然上人は「一枚起請文」で、「ただ往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたががなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず」と説かれました。

江戸時代の布教の大家、法洲上人は、この一文の一句ごとに「ただ」を添えて読むとその意味がはつきりするとおっしゃっています。「ただ」とは、「他の○○ではなくこれだけ」という意味です。

ただ他の目的ではなく極樂浄土へ行くためには、ただ他の修行ではなく南無阿弥陀仏と念仏をとる。法然上人は、このように目的と手段をはつきりとお示しくださっています。

そしてただ疑いなく往生するのだと信じ切って、ただ余計なことはせずに念仏を申す、と

心構えと目的達成のためにするべき具体的な行動を明らかにしてください。です。

「生き続けること」が目的ではなく、命尽きた後に極楽浄土へ往生することが目的だと考えるのは驚くべきことです。一般的な価値観からはこの教えは非常識に思えるかもしれませんが、「生きていてだけでいい」という価値観に対し、命尽きた後に極楽浄土へ行くことを目指す教えなのですから。

この世が究極の楽土であれば「生きているだけ」を求めることも良いでしょうが、現実はそのうちではないですよ。生きていくことは大変なことですし、命には限りがあります。そんな不安定な世界に対して、極楽浄土は究極の楽土です。この世にしがみついていないで、極楽浄土へ行くことを本気で求めてみませんか。

極楽へ行くためには、「我が名を呼ぶ者を救う」と阿弥陀仏が自らお誓いくださった「本願」に従い、「南無阿弥陀仏」とお念仏をとなえるだけです。「南無阿弥陀仏」の「南無」は「助け給え」を意味します。つまり「阿弥陀仏、お助けください」ととなえる者を、阿弥陀仏は一人残らず極楽浄土へ迎え入れてくださるのです。

極楽浄土へ往生するのは、臨終の時です。しかし極楽往生を願ってお念仏をとなえていたら、極楽浄土へ確実に行くことができますから、こんなに安心なことはありません。それを

法然上人は「うたがいなく往生するぞと思い取る」とおっしゃっています。

ですから、ただ「往生極樂」という目的を持ち、ただ阿弥陀仏の本願である「南無阿弥陀仏」と申すことを手段として、ただ「極樂往生を確信して」ただお念仏を「申す」のです。

右肩下がりの人生を嘆くのではなく、命尽きた先の極樂浄土を求めて、お念仏をとえ、極樂往生を確信して、この世をしつかりと生きていきましよう。

近年、日本各地で豪雨による水害が毎年発生しています。そのたびに、多くの人々が家や財産を失い、困難な状況に直面しておられます。

ある日の報道番組で、救助の様子を見守っていました。そこには、自宅が浸水し避難を余儀なくされた方々が、救助隊員に助けを求めている姿が映し出されていました。

その中で、ひととき心を打つ場面がありました。救助された方が涙ながらにこう語っていたのです。「家に帰りたい一心で救助隊員に手を振って助けを求めたら、隊員さんが気づいてくれました。救命ボートに乗せてもらったとき、助かった！と涙があふれました」。ただ実際には家に帰り着いた訳ではないのに、その方は「助かった」と感じる事ができているのです。

その報道番組を観て、ハッと気づきました。私たちもただ極楽への往生を一心に願って「南無阿弥陀仏」ととなえておれば、必ずや救っていただける。たとえ極楽浄土に行くまでにまだまだ寿命があつたとしても、極楽往生間違いない！ という信を持つことができれば、これからの生き方は変わっていくでしょう。疑いなく往生できる、と信を深めてお念仏をとこなえてまいりましょう。

かつて法輪寺の行事に必ずお越しくださっていたUさんは、親しいご家族を順に極楽浄土へと送り出し、天涯孤独となりました。Uさんは、幼い頃から信仰深いお父さまに導かれ、いつしか阿弥陀さまを心から慕い、お念仏をとなえる日々を送るようになっていかれました。若い頃は目の前のことが忙しく、自分の行く先に目を向けることもありませんでしたが、七十歳を過ぎて、Uさんは独り身でいることへの不安を強く感じるようになりました。「病気になるたらどうしよう」「もつと年老いて、自分のことが自分でできなくなったらどうしよう」「孤独死してしまったらどうしよう」といった悩みが、夜な夜な彼女の頭をよぎりました。

そんなある日のことです。ひとり静かにお仏壇の前でお念仏をとなえていると、これらの

不安が無意味だと、はたと気づいたのです。「私が抱えているモヤモヤとした不安は、悩んで解決する問題じゃない。誰もが元気で居続けることなんてできない。誰もが年老いていくし、誰もがいつかは死を迎える」と気づき、心の中で反芻しました。そして急いで今まで何度も読んできた法然上人の「一枚起請文」を取り出し、再び読み直しました。「往生極楽のために南無阿弥陀仏と申す」ということはこういうことだったのか、とその意味が一筋の光のようにスツと心に入ってきたのです。

それから年月が過ぎ、Uさんが八十五歳を迎える頃には、その心境はますます確固たるものとなりました。

「和尚さん、この歳になって一人でいる人は、みんな心細いって言うのよね。でも私はね、孤独死なんて覚悟の上なんですよ。いつも阿弥陀さまが私のそばにいてくださるから心細くなんかないし、それにお念仏をとなえていたら私がどんな最期を迎えようと、極楽へ迎え取ってもらえるから何にも心配ないのよね」と、カカカと豪快に笑って話してくださいました。

お念仏の信が深まると、このように受け取ることができるのか、と有り難く聞かせていただきました。

若さや健康、生きることを追い求めても、それらは必ずいつか失われます。老いや病氣や死は生きていれば例外なく誰にも訪れます。

泡のように消えていくものだけを追い求めるのではなく、極楽浄土への往生を目的に、南無阿弥陀仏とお念仏を申して、信を深めていきたいものです。そして極楽浄土へ往生するその時まで、この世をしつかりと生きてまいりましょう。

同称十念

只、往生極樂の為に

千葉教区 淨蓮寺 郡嶋 泰威

ようこそのご参詣、厚く御礼申し上げます。どうぞお姿お心持ち、共に樂にさせていただき、しばらくのお時間、お話をお聞きいただきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

巷では物価の高騰が止まりませんね。円安もどこまで進むのか？ 私たちの生活もこの先一体どうなってしまうのか？ 全く見通しが立ちません。

世界に目を向ければ、ウクライナでの戦闘が世界中に暗い影を落としています。いつになつたら戦いに終止符が打たれるのか、まったく見通しが立たない状況が続いております。一刻も早く戦火が止み平穏な日々に戻りますように、心から願うばかりです。

何ごとにつけても先の見通しが立たず、誰もが大きな不安を抱えて生きていかなければならない、今のような時こそ、揺らぐことのない、確かな心の拠りどころが必要です。その心

の拠りどころとなるもの。それが「信仰」です。法然上人がお説き示くださった浄土宗のお念仏の信仰は、浄土宗の檀信徒の皆さまはもちろん、これまでお念仏の教えに縁のなかった方にとりましても、大きな心の拠りどころになるものと信じて疑いません。

法然上人は『一枚起請文』のなかに、お念仏のみ教えの肝要について

ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取
て申す外には別の仔細候わず

とお示しくださっています。

「ただ往生極楽のためには」阿弥陀さまのもと、極楽浄土という苦しみのない世界に「往生する」〓お救いいただき、生まれ変わらせていただく、その為には、ということです。

極楽浄土に救われ、生まれ変わらせていただくにはどうしたらいいのか？ 法然上人は続けてこのようにお示しになっておられます。

「南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取りて」南無阿弥陀仏……とお念仏を申して、〓私のとなえるこのお念仏で必ず極楽に往生を遂げさせていただくのだ」と

疑うことなく、心にしっかりと思い定めて、ということです。

そして「申す外には別の仔細候わず」。ただ口に南無阿弥陀仏……とお念仏を申す。それ以上の難しいことは何一つありません、ということです。

つまり、極楽に往生するには、心に阿弥陀さまのお救いを疑うことなく深く信じ、口に南無阿弥陀仏とお念仏をとなえる、ただそれだけでよい、と法然上人はお説きくださっているのです。他に難しい学問も厳しい修行も何一つ必要ありません。兎に角、心に「助け給え」と願い、口に「南無阿弥陀仏」ととなえる、只それだけで、誰もが必ず阿弥陀さまのお迎えをたまり極楽浄土にお救いいただける。法然上人ははっきりと説き示してくださっているのです。

ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取って申す外には別の仔細候わず

法然上人が説かれた浄土宗のみ教えは、何を目指す教えなのか？ それは法然上人がここに「ただ往生極楽のためには」とお示しくださっている通り〈極楽浄土に往生する〉という

一点に尽きます。では、なぜ私たちは極楽に往生することを目指すのでしょうか？ それは、今私たちが身をおいている世界が「苦しみの世界」であるからにほかなりません。

私たちは今、人の身を受けて生きていますが、私たちの命は単に生まれてから死ぬまでに限ったものではありません。仏さまのみ教えでは、人として生まれる前Ⅱ「過去世」もあつたし、人の身を終えた後Ⅱ「未来世」もあると説かれています。「過去世」「現世」「未来世」の「三世」を生きている私たちである、ということです。

しかも、ずっと人間に生まれ変わり続けるというわけではありません。仏教の教えでは、私たちは「六道を輪廻している」と説かれています。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上、この六つの世界を「六道」と申します。人間の世界は、この六道の一つです。私たちは、人間としてこの世に生まれる前、遠い過去世から永い永い間、この六つの世界を生まれては死に、生まれ変わっては死に、をずっと繰り返してきたのです。この、生まれては死に、を繰り返すことを「輪廻」と言います。今、人間として生きている私たちですが、人の身を受ける前には、私自身も含め誰もが地獄や餓鬼などの恐ろしい世界に生まれ合わせていたこともあったのです。そんな中で、この度たまたま人間として生をうけることができた私たちなのです。

私たちは、単に人間の世界だけを生きているのではなく、六道という大きな世界の中を生きているのです。人として生まれる前の「過去世」や、死して後、永遠に続く「未来世」と比べたら、人間としての一生は、どんなに長生きしたとしても、まばたき一つ程度にすぎないのです。

又、六道の世界は「苦しみの世界」であるとも説かれます。どこに生まれても悩み苦しみから完全に逃れられず、六道を輪廻し続ける限り、果てしなく、悩み苦しみ続けなければならぬのです。だからこそ「六道輪廻」という苦しみの世界を抜け出して、極楽浄土という苦しみ煩いのない世界に救われ往くことを目指すのです。

阿弥陀さまは、六道を輪廻し、もがき苦しむ私たちを哀れみ「見捨てておけぬ、救わずにおけぬ。何とか救う手だてはないか？」との大慈悲のみ心から、長い時をかけて思いを巡らせ考え抜かれた末に願いを^{おこ}発されました。「もし私が仏となるなら、苦しみや煩いなど全くない、よろこびに満ち溢れた〈極楽〉という仏の世界を構えよう。そして私の建てる〈極楽〉に生まれたいと願って〈南無阿弥陀仏〉と我が名を呼ぶ者があれば、誰一人漏らすことなく〈極楽〉に救える仏となろう。もし、救いを求め〈南無阿弥陀仏〉と我が名を呼んで、救いから漏れる者が只の一人でもあれば、私は誓って仏とはならぬ」。そう願いを^{おこ}発し誓わ

れたのです。

そのうえで、この願いを叶えるために、想像を絶するご修行を積まれました。何度も何度も生まれ変わりを繰り返しながら、生まれ変わる度に、その身をなげうってのご修行を積み重ね、ご修行に費やされた期間は永遠ともいえるべき永い時に及んだのです。その結果、遂に「南無阿弥陀仏と我が名呼ぶ者を必ず極楽に救おう」との願いを完全に成就して、阿弥陀さまは仏となられ、同時に極楽という仏さまの世界を完成されたのです。

ですから、阿弥陀さまが仏となっておられる今、私たちが阿弥陀さまの救いを信じ、〈南無阿弥陀仏〉となれば、誰もが極楽にお救いいただける、ということは絶対に間違いのない、約束されたことなのです。

はるか遠い過去世から六道を輪廻し、もがき苦しみ続けてきた私たちですが、それもいよいよこの生涯限りです。共に南無阿弥陀仏となえて阿弥陀さまのお救いをたまわり、この生涯を境として、六道輪廻を離れ極楽浄土に往生を遂げさせていただくではありませんか。

この世のことに限って考えてみても、将来に明るい希望が持てる、ということは、生きて

いくうえで大きな力をあたえてくれるものです。

聖路加国際病院の名誉医院長をお務めになり、平成二十九年に一〇五才のご長寿の末に亡くなられた日野原重明先生は、著書の中でこのような言葉を残しています。

私たちは、願望の中に生きるのではなく希望の中に生きたいものです。なぜなら、幸福はそこにあるからです⁽¹⁾

あれも欲しいこれも欲しい、そんな願望にばかり振り回されていたら、いつまでも幸せを感じることできませんね。願望欲望に振り回されるのではなく「希望の中に生きたいものです」と日野原先生は記しています。

では「希望」とは具体的にどういうことでしょうか？日野原先生は、

希望とは可能性を信じること。今は嵐で辛くても、厚い雲の向こうにブルースカイがあることを信じて、雲が晴れるのを静かに待つ心もちに似ています⁽²⁾

と書いています。辛く苦しい時でも、明るい未来を信じ続けることが幸せにつながる、という事です。

ならば私たちはどんな希望を持てばいいのでしょうか？ どんな可能性を信じてこの世を生きていけばいいのでしょうか？ そのことをはっきり示してください。くださった方こそが他ならぬ法然上人ではありませんか。法然上人は、息絶えた後まで見据えた、「誰もが極楽に往生できる」という大きな希望を私たちにはっきりと描き示してください。くださったのです。

この世に生きていけば、誰しも避けられない悩み苦しみがたくさんあります。息絶えるその時まで、様々な苦しみに煩わされながら生きてゆかなければならないのがこの世の現実です。しかし、死んでしまったら全とおしまい、というわけではありません。息絶えた後、救われてゆく極楽浄土という仏さまの世界を阿弥陀さまがちゃんとご用意くださり、しかも「南無阿弥陀仏と我が名を呼べば必ず救う」と救いの手を差し伸べてくださっているのです。阿弥陀さまのお救いを信じ、この生涯を限りに極楽に往生を遂げることを願って、南無阿弥陀仏……とお念仏申す中にこの世を力強く生き抜いていく。これこそが、お念仏の信仰なのです。

ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取
て申す外には別の仔細候わず

共々に法然上人のみ教えを信じ、極楽に往生を遂げることを願って、日々怠りなくお念仏
に励んでまいりましょう。

同称十念

【註】

- (1) 日野原重明著『生き方上手』(ユーリィグ)二四頁
- (2) 日野原重明著『生き方上手』(ユーリィグ)二〇頁

あきがき

布教専門部会部会長 池田常臣

浄土宗開宗八百五十年御正当の翌年、令和七年度の『布教羅針盤』が発刊となりました。教師各位におかれましては、ここ数年開宗八百五十年を念頭に、日々の念仏教化また布教活動に取り組まれていたことと存じます。

今年度からの編集方針は、新たに原点回帰、元祖法然上人の御遺訓である『一枚起請文』に設定いたしました。令和七年度から令和十年度までの四年間にわたり『一枚起請文』の「往生極樂の為には、ただ一向に念仏すべし」をメインテーマとして、じっくりと向き合っていきたいと思えます。

『一枚起請文』は、その内容から法然上人の専修念仏一行を勧められた御心を、教師各位がしかと受け取らなければならない肝要なるお示しであります。

義山上人の『一枚起請弁述』には「広くすれば選択集、縮むれば一枚起請也」とお示しいただき、また浄土宗八祖・聖聰上人は「所詮は一枚起請文に習い収むる、これを故

実（規定・習慣）とする。」（『安心請決略抄』）とのお示しがあります。浄土宗の奥義のすべてを短い文章の中で言い尽くした『一枚起請文』を四年間にわたり、四分割して分
かり易く紐解き、宗内教師一人一人にお受け取りいただくことが主眼であります。それ
により自身の念仏精進と日々のあらゆる布教教化に役立てていただけたらと存じていま
す。

教諭として、御門主猊下には誠に有り難く『一枚起請文』を全教師がいかに関わり
お伝えしていくかの指針を、尊く分かり易く賜りました。従来は『浄土宗宗報』一月号
の紙面上にて発布いただいておりますが、今年度よりこの羅針盤の発刊に併せ頂戴し
てお示しさせていただくことになりました。この度賜りました教諭は、今後四年間にわ
たり、全教師布教教化の指針として有難くお導きを賜ります。

大正大学総合仏教研究所所長の林田康順先生には『一枚起請文』の心**【第一回】**―浄土
宗のお念仏―と題し、冒頭から「別の仔細候わず」までを分かり易く解きほぐしてい
ただき、『一枚起請文』執筆の背景や観想念仏と称名念仏の難易、称名念仏の専修につ
いてなどを、法然上人の御法語を引用いただきながら、詳細かつ順序立ててご教示をい
だいております。

そして全国三地区から布教の最前線でご活躍の上人方に『一枚起請文』の今回のサブテーマ「ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいに往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず」に沿って布教実例を執筆いただきました。各先生方にはテーマ（讃題）に基づいて、誠に分かり易く身近な例を挙げていただきましたながら、さらに法味を含めてお示しいただいている内容は、正しく伝えるという観点からも大いに参考にしていただけると存じております。

林田康順先生の『一枚起請文』の心の第一回——浄土宗のお念仏——の解説と、千葉・郡嶋泰威師、兵庫・北村隆彦師、鳥取・米村昭寛師の三者三様の布教実例をじっくりと味わっていただき『一枚起請文』第一回目の「ただ往生く別の仔細候わず」までの法然上人の示されんとするところを心腑に納めていただき、有縁の方々に取次ぎいただければと存じます。

現今、地球のさらなる温暖化による環境変化、世界情勢の混乱、諸物価の変動による生活苦、またAIやVRなどの急速な進展による身の回りの変化が日々目まぐるしく起きています。このような現況下であるからこそ法然上人の『一枚起請文』のみ心とみ教えを、この『布教羅針盤』を指針として有縁の方々に広くお伝えし、念仏相続する中に

安寧に日々を過ごしていただくことが浄土宗教師としての使命であると思うのであります。

開宗八百五十一年以降、愈々南無阿弥陀仏の声が響きわたることを願っていたと存じます。

至心合掌

令和七年四月一日

布教専門部会 池田常臣 城平賢宏 郡嶋泰威 北山大超 安達俊英 安永宏史

布教羅針盤 発刊内容予定

【令和七年度】「唐土我朝にゝ別の仔細候わず」

ただ往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず

【令和八年度】「ただし三心四修とゝ本願にもれ候うべし」

ただし三心四修と申すことの候うは、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふうちにこもり候うなり

【令和九年度】「念仏を信ぜん人はゝ一向に念仏すべし」

智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし

【令和一〇年度】「証のためにゝ所存をしるし畢んぬ」

浄土宗の安心起行この一紙に至極せり

令和7年度 布教羅針盤

『一枚起請文』

往生極樂のためには、ただ一向に念仏すべし

令和7年4月1日 発行

発 行 浄 土 宗

〒605-0062 京都市東山区林下町400-8
TEL (075) 525-2200(代)
FAX (075) 531-5105

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4
TEL (03) 3436-3351(代)
FAX (03) 3434-0744

発 行 人 川 中 光 教

監 修 教育学事審議会
布教専門部会

編 集 浄土宗教学部

印 刷 (株)共立社印刷所

表紙デザイン 藤原印刷株式会社

浄土宗宗務庁

©Jodo Shu, 2025 Printed in Japan
<https://jodo.or.jp/>



淨土宗